
魔法先生ネギま! ~白雪の軌跡~

いつでもどこでも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！～白雪の軌跡～

【EZコード】

N5576W

【作者名】

こつでもじこでも

【あらすじ】

雪の降るクリスマス・イブの日

1人の少女はその生涯を閉じた

だが、それは終わりではなかつた
神と悪魔から力を貰い

少女は第二の人生を謳歌する

魔法先生ネギま！～白雪の軌跡～始めましょ

プロローグ（前書き）

今書いている小説に行き詰まつたので投稿しました。
不定期更新ですし、駄文ですが見てください。
頑張って完結させるんで宜しくお願ひします m(・_・)m

プロローグ

12月24日。クリスマス・イブ。キリストの誕生日。聖なる祝祭。その日に私は、今にも死にそうな状態だった。

思えば私は生まれつき体が弱かった。

軽くぶつかっただけで骨は折れる、

風邪や肺炎などはしそつちゅうこじらせる。

小学生の高学年になるころは鼻血や吐血も繰り返す。

小学生と言つたが、勿論学校なんか行つた事がない。

そして、中学生頃の歳になつた時、
原因不明の病気にかかつた。

全國 . . いや、世界中の医師に診せても治療は出来なかつた。
なんせ、前例が全く無い、との事らしい。

そして、感染症だと困ると言う事で、

私は真つ白い部屋に隔離された。

唯一の救いが、外の世界が見れる大きな窓があつたくらいかな。

それに、両親もよくお見舞いに来てくれた。

2人はそれぞれ世界を代表する大企業の重役なポストを担つていた
のに、

週に一回は必ずお見舞いに来てくれた。

本当に申し訳ない気持ちと感謝の気持ちで一杯だった。

だけど、それも3年の年月が過ぎた頃、

私の病状は一気に悪化した。

一日に十何回も吐血を繰り返し、

身体中は激痛に苛まれて、

鎮痛剤も効かないほどヒドかった。

その度に両親は「命の覚悟をしてください」と電話で聞かされたみたいだった。

そしてこれも症状の1つなのか、

私の髪は色素が抜けた真っ白になつた。

日本人特有の黒髪がお気に入りだつたのになあ。

だけど最近になつて体の痛みは嘘みたいにナリを潜めた。

先生が言うには「もう生きるために必要な機能は要らなくなつたんでしょう」との事。

それが意味するは即ち

死だ。

そして私の命の灯火は今までに消えようとしていた。

「雪……雪……！」

「……」

「……」

お母さんは私の手を握りしめ、

お父さんは何も言わなけれど、その目から涙が流れていた。

勿論2人は防護服を着用している。

「雪……」めんね、丈夫な身体に産んであげられなくて……

「お母……さん、私の方こそ……ごめんなさい、

丈夫な子供に産まれなくて……2人に……迷惑をかけて……」

「迷惑なんかじゃない、お前が生きていたお陰で私も母さんも、とても救われたんだ」

「お父さんさんさん」

はは、お世辞でも嬉しい言葉だな、

それに、痛覚以外の感覚が残っていたのは幸いだったな。お陰で最期の最期にお父さんとお母さんの顔が見れて、ずっとと言えなかつた言葉が言える。

「お母さん・お父さん・最期に・一つだけ、言わせてください」

「雪つ・最期なんて言つちや黙田!!--

「へりん、いいの・自分の最期くらい・分かっているから」

次第に私の口蓋が重くなり、
意識が遠退していく・

どうやらもう時間が無いみたいだ。

でも、これだけの時間があれば最期の言葉を言つこなは十分過ぎる。

「お母さん、お父さん・私を産んでくれて・・・
ありがとうございます・・・」

ああダメだ、涙が止まらないよ。

私は体にある全ての力を振り絞ってお別れの言葉を言って、愛する両親を見つめながら意識を失った。

雪の降るクリスマス・イブの日、

私、柏木 雪は死んだ。

「あれ?」これは . . .

と思つたけど、まだ私の意識は健在だった。

いや、ここが死後の世界なのかな?

なんか真っ白い空間が広がっているし . . .

「おおー . . . よひやく . . . ハア、ハア . . . 見つけたぞ」

すると、急いで来たのか、

息も絶え絶えで白くて長い鬚を生やしたおじいさんが、

私の目の前に走つて來た。

「あの・・大丈夫ですか?」

取り敢えず心配だったので声をかける。

「ハア・・ハア・・、大丈夫じゃ・・でも、少し水を飲ませてくれ」

おじいさんはコップ一杯の水を飲む。

あれ?おじいさんは何所からお水を出したんだ?・・・

「全く・・・普段から運動せぬから、
こんなだらし無くなるんだ」

そんな事を考へていると、

私達の頭上から、眼帯を付けた厳つい雰囲氣のおじいさんが降りて
來た。

しかもかなりの筋肉質・・・

ちょっと怖いです・・・

「普段から事務仕事を押し付けているのは何所のどいつじゃったか

な？」

対する鬪のおじこさんは眼帯のおじこさんを半田で睨みつけた。
これが世に言ひジト皿と言つ奴なのでしょうか？

「あの……お話しの途中ですみませんが、ここは何所ですか？」

取り敢えず事態の説明を求めるために2人から話を聞くがなくちや。

「おお、やつじやつたな。すまないの」

「すまんすまん。失念しておったわ」

うん、2人の感じを簡単に言葉で現すと、
白い鬪のおじいさんは優しい感じの、孫大好き系。
眼帯のおじいさんは少し怖くて、頑固系。
今のところ鬪のおじいさんが私は好きだな。
その2人のおじこさんは床に手をつい・・・つて、え？

「「本当に申し訳なかつた……」」

いきなり土下座をしてきました。

「あの、ちょっと落ち着いてくださいー。
え？ 私なんかしましたっけ？」

もちろん私は2人に土下座をさせるような事は一切していません。
とにかくこの2人とは初対面です。

全く意味が分かりません。

「せうか……この子は分からんのじゃったな……」

「ならば最初から説明せねばならんの」

2人は姿勢を正してコホンっと、一つ咳き込む。

「まずは自己紹介せねばならんの、
儂の名はサタン。まあ、悪魔達の王じゃ」

「では儂も、儂はオーディーン。神達の王だ」

「髪のおじいさんがサタンで、
眼帯のおじいさんオーディーン？」

「ええええええええええええええええええーーー？」

私は大声で叫んだ。

だつてサタンって、オーディーンって . . .
え? なにこの超大物メンバーは!?

「まあまあ、いきなりで難しいかもしけんが、
取り敢えず落ち着くんじや、な?」

髭のおじいさん . . . サタンおじいさんが肩を叩いて落ち着かせてくれた。

それとフカフカのソファードジユースをくれた。
サタンおじいさん . . . 優しいよお . . .

「まずはお主にこの世の摂理を教えよ!」

そういつたと、オーディーンおじいさんは黒板を取り出した。
この中間って何でも出せるんだね . . .

「まずは我々の説明だが、儂等“神”と呼ばれる存在はこの世全て
の生命を生み出し、生き物のバランスを調節する。

次に悪魔の説明だが、悪魔達は終わりを迎えた命を回収する。
これも生き物のバランスを調節するためだ、
ここまでは分かったか?」

「要は、神は始まり。

悪魔は終わりの使者と言つた感じじゃな」

「は、はい」

オーディーンおじいさんの説明に、サタンおじいさんが捕捉されてとても分かりやすかつた。

ちなみにサタンおじいさんは、説明の合間にちょくちょくとお菓子をくれた。

「だが、ここで重大な事が起つた」

「重大な……事？」

「うむ、先程言つたがこの世界は微妙なバランスで成り立つてゐる。それは生命の数であり、寿命であり。幸せも例外ではない」

「プラスでも駄目じゃし、マイナスも駄目と言つ事じや」

「じゃが最近、人々の幸せに偏りが出てきたのだ。はつきり言つと、人々が不幸になつてきたのだ。このままでは世界が崩壊する危険が出てきたので、我々は天秤の安定を図るため、

【運命システム】を使う事に決めた

「運命システム……？」

「そうだ、神は命を生み出すだけで、どう生きるのかは決めない。

運命なんて物は生き物を縛る鎖だからな。

だが、その運命を決める事が出来るのが、この運命システムなのだ

オーディーンおじいさんの手にはあつたのは普通の紙。
「どうやら」アレが運命システムと言う物らしいです。

「本来これを使う事は天魔界条約で固く禁止されている。
だがコレを使って人々の余分の不幸を1人の人間に背負わせ、殺す
事で、
幸せの天秤を平行に戻すことに決めたのだ。
その不幸を一身に背負つたのが . . . 」

「私、と言つ事ですか . . . 」

「これでようやく納得しました。

つまり私は世界のために生贊にされたと言つ事ですか。

「本当に申し訳なかつた。世界のためとはいえ、
君にこんな非道い人生を歩ませてしまつて . . . 」

「お主にはなんと詫びればいいのか . . .
償えるなら償わせてくれ。
なんなら儂等の命でも構わん」

2人はさつきと同じように土下座した。

償わせるとこつても、そういうの好きじゃないんですよね。
うへん、どうすれば・・・そうだ！

「じゃあ、3~4個お願ひしていいですか？」

「つむ、全能神の名にかけて叶えよ！」

「まず一つ目、お母さんとお父さんに子供を授けてください。
二つ目、お母さん達を可能な限り幸せにしてください。
三つ目、一度と私のような人間を創らないでください。
これで以上です」

「待つ・・・待つんじゃ！」

君はそれでいいのか！？

君が望めば全能神の座も、
魔王の座にも就けるのじゃぞ！？

サタンおじいさんは私の願いを聞いて慌てた。
そんなに変なお願いだつたのでしょうか？

「2人とも勘違いしているみたいですが、

私はそんな全能神やら魔王の座なんて欲しくもありませんし、
2人の命で償わせる事もしません。

確かに私の人生は最悪でした。

死にたいと思つた事なんて一度や一度ではありません。

でも、私は幸せでした。

両親は私に沢山の愛情を注いでくれましたし、
病院の先生も必死に私を治そうと頑張ってくれました。
学校に行けなかつたのが唯一の心残りでしたが、
私は私の人生に満足しています。

だから私は私のための願いではなく、

私のために尽力してくれた人達を幸せにしたいんです

「…………」「…………」

私の言葉を聞いた2人は口をあんぐりと開けて惚けていた。
全能神のオーディーンと魔王のサタンがこんな表情をするなんて、
結構凄くありません？

私のいい思い出になりました。

「……分かつた。お主の願いは叶えよう」

「でも本当にそれだけでよいのか？」

「君が願えば第二の人生も謡歌出来るのに」

「うーん、じゃあ転生は出来ますか？」
マンガやアニメの世界の登場キャラクターとして「

思い出すのは入院したばかりに見てたＳＳ。
確か転生モノの作品も結構あつた。

「つむ、それぐらい訳ないぞ」

「して、どの世界に行くのかの？」

もちろんそれも決まっている。

学校の生徒として通り、尚且つファンタジーが入り乱れる世界。
それは

「魔法先生ネギま！の世界です！！」

マンガは3巻しか見てないけど、
あそこなら私も大丈夫な筈。

「了解した。で、能力はどうする?
本来は制限をかけるのだが、
お主なら何個でも大丈夫だぞ」

そつか . . . あの世界はバトルもあるんだよね。
確かネギ先生とエヴァちゃんが戦つていたし . . .
ちなみに私はエヴァちゃんが大好きです。
うーん、どうしようかなー . . .
あまり相手を傷付けたくないしなあ。

「ふむ、ならば結界魔法はどうだ？」

おつには最適だし、心優しこそおせせピッタリだぞ」

「やうですね、私にピッタリです。

ありがと、オーディーンおじこちゃん

「おじい・・・むう・・・

「「、「めんなさい！

もしかしてイヤでした？」

「い、いや・・・もつ一度呼んでくれぬか？」

「?・・・オーディーンおじこちゃん?」

どうしたんでしょう?

何故か“おじこちゃん”の言葉に物凄く反応しているんですが・・・

「そ、そ者がそがーおじこちゃんかー!
嬉しいぞ、まるで孫娘が出来たみたいだ!!
ガツハツハツハツハツハ!!」

オーディーンおじこちゃんは私を高く上げてクルクルと回り出しました。

前言撤回です。オーディーンおじこちゃんは頑固系ではなく、孫大好き系だったみたいです。

「よし！ こうなつたら大盤振る舞いだ！！

魔力量はネギの6倍に設定しよう。

それにこの世界の魔法だけじゃつまらないんーー！

儂の魔法も雪に教えよう！

勿論、結界魔法だけだがな。

良かつたな雪、これで世界最強の魔法使いだぞ！！

この世の春が来たあああ！！！」

なんか途轍もない事になつて来ました
確かオーディーンつて神話だと、
魔法の達人だと書いてあつたような
チート真っしぐらですね。

「オーティーーン、やねぐらこじるのじゅ。雪だつて困つておるだらう」

好い加減田^{ミタ}が回りそうな時、
サタンおじいちゃんが止めてくれました。

「む、すまなかつたな雪。
且とか回つておらんか?」

「な、なんとか大丈夫です。

「ありがとうございます、カタンおじこちゃん」

「ふおつふおつふお。よこよこ、気にするでない」

そつ言ひつい、サタンおじこちやんは私の頭を優しく撫でてくれました。

氣持ち良いです~

「よし、儂からも細やかな贈り物じや。儂も結界魔法をプレゼントしねつ。それとほれ、向こうの世界のお金じや。や無駄遣いするでないぞ?」

やつ言ひついサタンおじこちやんから貰つた額は兆を超えてました。何に使えばいいのでしょうか・・・

「取り敢えず結界魔法の使い方は頭に入れてあるから大丈夫じやろ
「

「忘れ物はないか?荷物は持つたか?おしほりやハンカチは?」

オーディーンおじこちやん。

遠足に行くんじゃないんだから・・・

「色々とあつがとついたしました」

「なに、これくらい何とも無いわ。
ではな雪。楽しんで生きるのじやよ」

「イジメられたら言つんだぞ！」

儂のグングールで突き殺してやるからなーーー。」

オーディーンおじいちゃんは光り輝く槍を振り回していく。
うん、本当に殺りそうだな。

イジメられないように注意しないと、
主に加害者の子のために……

「分かりました。

サタンおじいちゃん、

オーディーンおじいちゃん。

行って来ます

次第に私の意識は眩い光に呑まれて行き、
私は意識を失った。

プロローグ（後書き）

いかがでしたか？
感想とかくれると嬉しいです（^ - ^）／

主人公説明（前書き）

11 / 20 【聖結界・城】【魔結界・靈喰】を加筆

主人公説明

名前：柏木 雪

性別：女性

構成

世界を守るために、人々の不幸を一身に背負わされた少女。
死後の世界で神と魔王に力を貰い、ネギま！の世界に転生した。
ネギま！はマンガで3巻しか読んでおらず、原作知識は殆ど無い。
何故3巻しか読んでいないのかというと、
病状が悪化して読むどころでは無くなつたから。

ファンタジーは好きだけど、戦闘は好きじゃないと言つ事で、結界
魔法を使う。

だが、雪の魔法は“防御”ではなく“結界”であり、
その違いを、雪はまだ知らない。

性格

基本はとても優しく、どんな人にも分け隔てなく接する。
何よりも友達や友情を大切に想い、
その想いに異性も同性も関係なくドキッさせられる。
「怒らない人ほど、怒ると恐い」は、雪のためにあるような言葉で、
友達が傷付けられた時の雪の怒りは途轍もない。

容姿

体のラインはとても細く、
病気のせいで髪の色素は抜け、
生涯の殆どを病室で過ごしたため、
白髪で色白である。

ちなみに、髪の長さは腰まで届くロングである。

能力

魔力量・ネギ・スプリングフィールドの6倍

気：0

戦闘スタイル：極度の魔法使いタイプ

属性：精霊よりも遙かに格上の神と魔王の加護を得ているので、全ての属性は余裕で使える。

魔法：雪は攻撃魔法が全く使えない

その代わり防御魔法は世界最強クラス
結界魔法にいたっては核爆弾すら防ぐ

魔法一覧

風障壁

作中では10セトラックすら防ぐ硬さだが、

雪にかかりればナパークム弾やトマホークミサイルする防げきる。

氷楯

相手の攻撃魔法を跳ね返す。

雪の場合は自分の魔力を上乗せして跳ね返すので、
相手からしたら、溜まつたもんじゃない。

聖結界

雪の真骨頂。

全能神オーディーンから授かった魔法の総称。

防御の他にも治癒や支援する効果を持つ結界がある。

聖結界一覧

【聖結界・城】 11 / 20 加筆

オーソドックスな防御結界。

聖結界の中では一番初歩で最下級。

だがその強固さは最強クラス。

純粋な力押しだと、エヴァのエクスキューションソードを以つてしても破れる確率は五分。

だが、転移などを断絶することはできず、結界内に転移するか、障壁突破などの魔法を使つた方が早い。

それでも多大な魔力と時間と労力を使うが . . .

魔結界

雪の真骨頂。

魔王サタンから授かつた魔法の総称。

防御の他にも妨害などの効果を持つ結界がある。

魔結界一覧

【魔結界・靈喰】 11 / 20 加筆

結界内にいる全ての精霊を喰らう。

魔結界の中では中位クラスの結界。

この結界の中では如何なる精霊も結界に喰われる。

精霊によって効果を発揮している事象は全て無効果される。

ありていに言えば、呪文は全て無効果される。

だが、既に効果が完了しているもの、例えば吸血鬼の呪いや、完全に石化された呪いには精霊がないので（作者の「ご都合」）解呪できない。

その場合は、聖結界のほうに解呪の結界があるのだが、それは結界内にいる時だけなので、永続的な解呪ではない。

とまあ、こんな感じです。
隨時、加筆していきます。

ついにきました、ネギマーの世界（前書き）

取り敢えず完成したので投稿します。
このトンショーンがどこまで続くのかな？

ついにきました、ネギまーの世界

雪 side

「ん・・・着いたのかな？」

目を開けると、私は林の中にいた。
しかも何故か白いワンピースを着ている。

うーん、ここが麻帆良学園なのかな？
確かに麻帆良学園にも、こういう雑木林があつた・・・はず。

だけど、それよりも気になるのが・・・

「私の・・・足だ・・・」

私は今、立っているのだ・・・
自分の足で、自分の力で。

いつからなのか、体は動く事が出来ず、
歩く事すら諦めた私は今こうして立っている。

私の中にある言い知れない感情が、
胸の中から沸々と沸き上がってくる。

「私・・歩ける・・歩けるんだ！・！」

いつなつたらむづ、自分で自分を止められない。

私はゆっくりと歩き出し、次第にスピードを上げて走り出した。

「はあ、はあ、はあ・・あたつ！」

だけど感覚はまだ戻らないのか、

私は木の根っこに躊躇して盛大の転けた。

「あたた・・ふふつ・・ふふふ・・・」

痛い。痛いのに笑いが込み上げてくる。

いつもだつたら大怪我、最悪死んでもおかしくないのに、

私の体はいたつて健在だった。

鼻から伝わるジンジンとした痛さが、
私の中のナニカを満たしてくれる。

言つておくけど、私は決してMではない。

「あ、あれは・・・」

私は空を見上げて見ると、

空は明るい満月の光によつて照らされていた。

そして、その光に映し出された巨大なシルエット、

それは . . .

「世界樹 . . .」

そう、麻帆良学園の代名詞とも言える巨大な樹、

それを見てよつやく私はネギまーの世界に来たんだと実感した。

「 . . . よし、あそこまで行ってみよう」

取り敢えずこの雑木林を抜けなくちゃいけないし、

足の感覚を取り戻さないと。

私は世界樹に向かって走り出したんだけど . . .

「はあ . . . はあ . . . はあ . . . もう、疲れちゃった」

走って10秒も経たない内に疲れた。

どうやら私の体は相当へなちょこらしく、

まあ、生前殆んどベッドで過ごしたから仕方ないか。

「でも . . . 謹めない」

息をするのが苦しい。肺がはち切れそう。

足がもう動きたくないって言っている。
それでも私は諦めずに走り続けた。

苦しい。辛い。

なのにとても気持ち良い。

額から流れる汗が、身を叩きつける風が、
私をとても満たしてくれる。

「はあ・はあ・やつと、着いた・・・」

一体いつまで走っていたんだろう?

10分かな?はたまた1時間かな?
時間を忘れて夢中に走りながらも、
私は世界樹に辿り着いた。

世界樹はマンガで見た時よりもずっと大きく、
月明かりに照らされてとても神秘的だった。

「でも・・・ちょっと、休憩・・・」

目的地に着いた瞬間にドッと疲れが押し寄せた。
さすがにもう限界だよ。

「すう・はあ・すう・はあ・・・」

酸素が肺に沁み渡る。

それと同時に私のナニカが満たされる。

「やうか・・私は・・・」

そつか・・・そうなんだ・・・

わつきから私の中にあるナニカがよひやすく分かつた。

「私は・・・生きているんだ・・・」

転んだ時の痛みも、走った時の苦しさも、

そのどれもが生前とは全く違う感覚。

あの異常な痛みではなく、日常としての痛み。

それが私の“生きている”といつ感覺を満たしている。

「生きている・・私は、生きているんだ・・・」

その言葉と一緒に涙が流れてきた。

あれ?どうしよつ・・・

涙が止まらない、止まらないよ・・・

悲しくないのに、なんで、なんで・・・

「お、おい、そこのお前……だ、大丈夫か……？」

「ひっく・・うん・・・ふえ・・・?」

すると、私を呼ぶ声が聞こえた。

振り返つてみると、そこにいた人物は私のよく知る人物だった。それは……

「ま、迷子なのか？それともお腹が減ったのか？」

私の大好きなキャラクター。

金髪幼女こと、エヴァンジエリン・A・K・マクダウル。
通称エヴァちゃんと、そのパートナー、絡繆 茶々丸さんだった。

エヴァンジエリン side

「ふふふ・・いい夜だ・・今宵は満月か・・・」

私は窓に腰をかけてワインを傾ける。

ふふふ、本当にいい夜だ。

今は忌々しい呪いに封印されてるとはい、

満月の時だけは力が昂ぶる。

これで呪いがなければ・・と言つても、無い物ねだりしてもしょうがないな。

私は満月を肴にしながら再びワインを傾けようとした時・・・

「な・・・つ！？、なんだこの魔力は！？」

「ああ、私も感じ取つたぞ。今回は相当の大物だな」

突如膨大な魔力を感じ取つた。

何なんだこの馬鹿げた魔力量は！？

じじい・・いや、あのサウザンドマスターをも軽く凌駕しているぞ
！！

「マスター。学園長からお電話です」

「分かつた。すぐつなげ」

じじいもすぐに感じ取つたのか、私に電話をかけてきた。
本来なら居留守や出ても拒否するのだが、

今回だけは出てやろう。

「ヒガアー！今の反応、お主も感じ取つたのじやろ」

どうやら、じじいも相当慌てているみたいだな。

あの狸じじいがここまで慌てるなんて滅多に見られない。
その点だけは侵入者に感謝するか。

「呑気に話しどる場合か！」これは学園始まつて以来の重大な危機じゃ！

儂等もすぐに部隊を編成せらるからH'ウアも向かつとくれ……」

おいおい、満月で少し力が戻つてゐるだけで、私は今魔力を封印されてゐるんだぞ。戦いでは魔力量の差など幾らでも埋められるが、さすがに今回だけは私もキツイ。

「じじい。貴様、私を殺すつもりか？」

私は電話越しに殺氣を叩きつける。

「い、いや、言葉が悪かった。
お主にやつて欲しいのは偵察じや。
相手の特徴を探つとくれ。
いざという時には退いてくれても構わん」

「偵察……か。

この私を偵察なんかに使うのか……
まあいいだろう、だが潰せるよつなら潰してもかまわんだろう？」

「ああ、じゃが出来るだけ生け捕りにしてくれ。
相手の目的も知りたいしの」

「ふん、気が向いたらな

そう言って私は電話を切った。

「 茶々丸。すぐに用意しろ。侵入者を潰すぞ」

「イエス。マスター」

私は従者の茶々丸を連れ、夜の麻帆良に飛び立つた。
ふふふ、無粋な侵入者め。

私の宵越しの肴を邪魔しあつて . . .

この麻帆良に来た事を後悔させてやる。

「 精々私を楽しませてくれよ。なあ、侵入者?」

~~~~~

だが侵入者は案外すんなりと見つかった。  
どうやら林の中を走っているみたいだな。  
魔力も隠さずにだだ漏れに流して、  
ただの馬鹿なのか?

それとも余裕のつもりか？

ふん、まあいい。早く出てこい、貴様の面をおがんでやる。

「マスター。どうやら出て来たみたいですね」

「……ああ、そうみたいだな」

侵入者が林から出て來た。

だが、林の中から出て來た人物は……

「うへ、子供だと……！」

白いワンピースを着て、腰まで届く白い髪、まるで雪を思わせるような白い肌をした、年が中学生くらいの少女だった。

だが全力で走ってきたのか、着いた瞬間に肩で息をしていた。  
その姿はとても愛らしく、  
微笑ましい……じゃない！！

「お、おい茶々丸！！  
あいつが今回の侵入者だよな？」

「はい、膨大な魔力は彼女から観測されます

そ、そ、うか・・・うん、そ、うだよな・・・。  
私、が間違える筈ないよな・・・。

それにして、も不思議な奴だな。  
膨大な魔力量を保有しているくせに周囲を全く警戒せず、  
どこをどう見てもただの素人ではないか。  
そいつはイキナリ泣き出して・・・つて、おおい！――

「ちや、茶々丸！――

ああ、あいつ泣き出したぞ――！」

「や、そ、そつみたいです・・・」

ど、どうすればいいのだ！？  
何故泣き出したんだ！？

茶々丸も突然の事で慌てているし、  
も、もしかして1人で心細いのか？

「取り敢えず降りてみるぞ。茶々丸」

「イ、イエス、マスター」

私達は地面に降り立つて、  
ゆっくりと、驚かさないよう近づく。

そして私達は少女のすぐ近くに来た。

決して威圧しないように、優しく、優しく話しかけるんだぞ、私。

「お、おこ、そこのお前……だ、大丈夫か……？」

よし、ファーストコンタクトは完璧だ。さすが私……！

「ひっく・うん・・・ふえ・・・？」

ぐはっ……

な、なんといつ可愛さだ。

しかも「ふえ・・・？」って、これは反則ではないか……！

抱きしめたい・・抱きしめてあげたいぞおお……！

い、いや落ち着け私……

まずは冷静になるんだ……

深く深呼吸して、ついでに素数も数える。  
数えたな？数えたな？よし次だ。

「ま、迷子なのか？それともお腹が減ったのか？」

何故こいつが泣いているのか考えているんだ。

まず第一の可能性。

こんな夜遅くに女の子が一人で歩いている。

考えるのは迷子だ。

世界樹に向かつて来たのも田舎になるものがあると思つていたのか  
もしれない。

第一の可能性。

改めて近くで見ると、こいつの体はとても細いし弱々しい。  
もしかしたらお腹が減つているのかもしない。

ふふ、我ながら見事な名推理。

幸い側には料理が美味しい茶々丸がいるし、

迷子だとしても私達がいる。

見よ！この完璧な布陣！！

「ぐすん・・・違つの・・違うのぉ・・・」

私の名推理がはずれた・・だと！？

奴はまた泣き出しちゃった。

「おお、落ち着くんだ！！

まずは落ち着いて、それから話してくれ・・な？」

「ぐすっ・・分かり、ひっく・・・ましたあ・・・」

ぐつ、やはり可愛いい・・・

この保護欲をかき立てのような感じがなんとも・・・

い、いや落ち着け。

取り敢えずこれでようやく話しが聞ける。  
見た感じ敵では無いよつて感じるが、  
さて、一体どうじょうか . . .

雪 side

エヴァちゃんは私が泣き止むまで待つてくれました。  
ちょ、ちょっと恥ずかしかったですぅ . . . / /  
顔が赤くなっているのが自分でも分かります / / /  
でもなんでエヴァちゃんまで顔を赤くしているんだろう？

「あ～、じほん、ではまず最初に聞くが、お前は一体何者だ？」

エヴァちゃんは一つ咳払いして、私の事を聞いてくる。  
うへん、いにはどう言つたら良いんだろう？ . . .  
よし、まずは . . .

「私の名前は柏木 雪です。初めまして」

自分の名前を言つて、ペコッとお辞儀する。

「む、これはじー寧こどうも。」

私の名はエヴァンジエリン・A・Kマクダウエル。

で、隣にいるのが絡繆 茶々丸 つて、違ああああ「フーーー！」

「どうやら違ったみたいですね。

最初っから分かつていただけど・・・

「私が聞きたいのは、どうやってこの学園に入つて来たのか、についてだ！」

「って言つても何て言えぱいいのかな？

「転生してやつて来ました（キラッ）なんて人生の黒歴史になりそうな事は言いたくないし、

かと言つて嘘を言つ訳にはいかないし、どうすれば・・・

「う～ん、気付いたらここに居た・・・訳でもないし、なんて言えぱいいのかな・・・？」

「なんだ？要領を得ない答へだな・・・」

「うう・・・」めんなさー・・・

私は少し申し訳ない気持ちで頃垂れる。  
なんかこういつひ驕すような行為は嫌いです。

「うう、分かったからそんな捨てられた仔犬のような目で見ないで

くれ。

取り敢えずじじいに電話してみるから待つてくれ

そいつ言つと、茶々丸さんからケータイを受け取つて、  
エヴァちゃんは“じじい”といつ人に電話をかけた。

「ああ、私だじじい。侵入者の件だがな・・・  
済んだ。

いや、倒してはいない。

何と言えばいいのか・・・

取り敢えず部隊をすぐに解散せん。

ああ、そうだ。私が連れて行く。

そうだな・・・タカミチは同伴させてもいいだろ？  
他の奴等は全て帰せ。

いいか？変な事を考へるなよ？

もし私の言葉を違えた場合・・・

ふん、ではな

そいつ言つてエヴァちゃんは電話を切つた。

「あの・・・もしかして侵入者つて、私の事・・・ですよね？」

そういえば麻帆良学園って侵入者を探知するみたいな結界があつたはず。

私って一応侵入者……なんだよね？

皆んなに迷惑かけちゃったな……

「え、『めんなさい』！」

皆んなに迷惑かけちゃって……

「いや、いや気にするな……

ほら、早くじじの所に行べ。

私に着いてこー

エヴァちゃんはすぐに後ろを向いて歩いて行っちゃった。

その後ろでは茶々丸さんがエヴァちゃんに微笑ましい表情をしていた。

ん？何でなんだうつ？

「あ、待ってくださいエヴァちゃん」

取り敢えずエヴァちゃんに着いていかないと。

「うやん、つて言つたなあーーー！」

エヴァ Side

取り敢えず私はこいつが泣き止むまで待つた。  
しばらくして泣き止んだようだが、

目が赤くなつており、

恥ずかしながら、顔も少し赤くなっている。

イカシイカシ！このままでは話しが脱線してしまう。

「あ～、じほん、ではまず最初に聞くが、お前は一体何者だ？」

まずはこいつの正体を、  
目的を探る事が先だ。

「私の名前は柏木雪です。初めまして」

そう言つて、奴・・・雪はペロリと可愛らしくお辞儀した。

「む、これがアーニーだ。」

なにこいつは自己紹介しているんだ！？

私の知りたい事はもつと別のものだ！

「私が聞きたいのは、どうやつてこの学園に入つて来たのか、についてだ！」

「うーん、気付いたらここに居た……訳でもないし、なんて言えばいいのかな……？」

だが雪から帰つてきた答えは、

わつきの血口紹介よりも遙かに価値のない答えだった。

「なんだ？要領を得ない答えだな……」

「うう……」めんなさい……

何故だ……

雪から犬の耳と尻尾が見えるぞ……  
しかも両方シュンとして垂れている。

何故か私まで申し訳ない気持ちになつてくる。

「うう、分かつたからそんな捨てられた仔犬のような目で見ないでくれ。

取り敢えずじいに電話してみるから待つてくれ」

私は茶々丸からケータイを受け取り、じじいに電話をかける。

「　　おお、エヴァアか」

「ああ、私だじじい。侵入者の件だがな・・・  
済んだ。」

「ふあ？、もしかして倒したのか？」

「いや、倒してはいない。  
何と言えばいいのか・・・」

取り敢えず部隊をすぐに解散せん。」

「ん？どういう事じや？」

まあいい、部隊はすぐ解散させる。

侵入者はお主が連れてくるんじやろ？」

「ああ、そうだ。私が連れて行く。

そうだな・・・タカミチは同伴させてもいいだろ？。  
他の奴等は全て帰せ。

いいか？変な事を考えるなよ？

もし私の言葉を違えた場合・・・

私はまたも電話越しに殺氣を呪きつける。  
自分のためならいざ知らず、  
他人のためにこんな事をするとは・・・  
ふつ、一体どうしたんだと呟うのだと私は。

「わ、分かった、待つておるや」

「ふん、ではな」

「じこまだしこなば、あの狸じじいも余計な事は考へないだらう。

「あの・・・もしかして侵入者って、私の事・・・ですよね?」

私とじじいの会話でなにかを感じ取ったのか、  
雪はバツが悪そうな顔をする。

「『』、『』めんなさい!」

皆んなに迷惑かけちゃって・・・

雪の体からまた犬の耳と尻尾が現れた。  
これが俗に言う、犬つ娘という奴なのか?  
やはり・・・可愛いな・・・

「い、いや気にするな・・・  
ほら、早くじじいの所に行くや。」

「私に着いてこー」

私は赤くなっている顔を悟られなによりに踵を返し、  
学園に向かつて歩き出す。

茶々丸が何故か微笑ましい表情を向けていた。  
あとでネジを回してやる . . .

「あ、待つてください」ヒヅアちゃん

その後ろを雪は小動物みたいにトコトコと着いて来た。  
それよりも . . .

「ちやん、つて言ひなああーーー！」

私は600歳を超えているんだぞーーー。  
ちやん、と呼ぶなーーー！

## ついにきました、ネギまーの世界（後書き）

やつぱりエヴァちゃんは可愛いです。

私が一番好きなキャラクターです。

この物語のメインヒロイン？はエヴァちゃんかな？

次回はあのハチャメチャなキャラが登場！？

はたしてそのハチャメチャなキャラとは誰なのか？

次回をお楽しみに（^-^）-

感想まつてま～す＼(^o^)／

## 麻帆良に入学しました！（前書き）

なんとか一話仕上げました  
まさか一週間以上かかるとは . . .  
もう少し早いペースで更新したいです。

## 麻帆良に入学しました！

雪 side

H'ヴァちゃんに連れられて、私は麻帆良学園女子中等部にいます。  
どうやらH'ヴァちゃんが言っていた“じじい”という人は、この麻  
帆良学園の学園長らしいです。

そういうえば学園長の後頭部つて何であんなに長いのかな?  
あの後頭部には謎の生物が棲んでいて、それが学園長の本体だった  
りして . . .

「ドキッ！驚愕の事実！－学園長は宇宙人だった！？」なんてね。  
まあ、冗談はこれ位にして。

何で女子中等部に学園長室があるんだろう?  
もしかして学園長は変態さんなのかな？  
私の中で学園長の株価が急速に下落している、ついこの頃です。

「おい、ちゃんと着いてこいよ。迷子になつても知らんぞ」

「あ、はい。ごめんなさい」

そんな事を考え込んでいるとH'ヴァちゃんに怒られちゃいました。  
でも改めて見るとやっぱり凄いなあ . . .  
教室の風景 . . 等間隔に並んでる机と椅子 . . 使い込んでいるのか、  
綺麗に消えずチョークの粉が薄つすらと残っている黒板 . . .  
これが . . これが学校。私が夢にまでみた学校の風景 . . .

「ふふ・・・ふふふ・・・」

その風景に私がいて、そして沢山のお友達と楽しくお喋りして、みんなで一緒に授業を受ける・・・

そんな光景を想像したら何だか笑いが込み上げてきちゃった。

「むへ・ぢりじたんだ? イキナリ笑いだして」

「あ、えと・・なんだかとても新鮮で、つい・・・」

「新鮮? 確かに麻帆良は世界レベルで大きい学園だが、大きさ以外は普通の学校と変わらんぢり」

「なに? それはぢりいつ 「マスター。到着しました」 む、そ

うか・・・」

エヴァちゃんが喋ったと同時に田的地區に着いた。

エヴァちゃんは渋々といった様子で会話を止めて扉の前に向き直つた。

扉は他の部屋と違つてとても重々しく、【学園長室】と書かれた札がかけられていた。

す・少し緊張してきました・・・

「まづはじじ」と会つてこれから的事を決める。なに、悪いよう

はせんよ。

それと、やつらの言葉には後で必ず答えてもらひつや」

エヴァちゃんはそれだけ言つと、学園長室に入つて行つた。  
しかもノックもせずに「連れてきたぞ、じじい」の一言だけ。  
もしこれを言葉で表すとしたら、ズカズカつといつた言葉が一番正  
しいと思う。

それに続いて茶々丸さんがペコッと一礼してから入る。

うん、私もそれが一番正しいと思うな。

私も茶々丸さんにならつて「失礼します」と一言、そしてお辞儀し  
てから入る。

その中に居たのは . . .

「成る程のう . . . 君が件の侵入者 . . といつか迷子じやな」

あまりにも人間離れした外見 . . いや、後頭部を持つおじいさんと  
. .

「これは凄いね . . . 魔力量はナギさん以上だね . . .」

メガネをかけた渋いおじさん、明日菜ちゃんの想い人の高畠先生だ  
つた。

side out

雪が部屋に入ったあと、学園長に「まずは座りなさい」と促されて雪はソファーに座った。

その向かいにテーブルを挟んで学園長とタカミチ。そして学園長専用と思われる1人用のイスにエヴァが座り、側には茶々丸が控えている。

図で表すと

高畠 学園町

エヴァ

茶々丸

雪

な感じだ。

何故かエヴァがエラそつに座っているが、まあエヴァだから仕方ないか。

「さてと、まずは自己紹介からじゃな。

私の名は近衛 近右衛門。この麻帆良学園の学園長をしておる」

「僕の名前はタカミチ・T・高畠。よろしくね」

「わ、私の名前は柏木 雪です。は、初めまして」

2人に続いて雪も自己紹介するが、緊張しているのか少し吃りながら

らの自己紹介となつた。

その雪の姿に1人の吸血鬼は微笑ましい視線を、1人のロボットは最新技術を駆使して録画していた事を他の人は知らない。もちろん画質はブルーレイ。その映像はロボットの記憶領域に永久保存された。

「自己紹介も終わつた事じやし、早速話しに入るぞ。

単刀直入に聞くが、君の目的は何かの？

どうやって麻帆良に入ったのじや？」

近右衛門は雪に優しく語りかけるが、その言葉とは真逆に近右衛門は魔力を開放して雪にぶつける。

それを見たタカミチは少し焦り、エヴァ達は傍観を決め込む。だが当の本人はといふと . . .

「えと . . 転せ . . ジャなかつた。その、なんて言えば良いのかな . . .」

近右衛門の魔力を全く気にせずに質問に頭を悩ませていた。いや、気にしてないではなく、厳密に言うと気付いてない、と言つた方が正しい。

幾ら神と魔王からチート級の能力を貰つても雪はただの一般人、気付けとというのが無理な相談である。

それを分かつた近右衛門は魔力を収め、タカミチはポケットから手を抜く。

エヴァに到つては近右衛門の物だらうか、日本酒を飲み始めている

始末。

それを見た近右衛門は「ふお！？ 儂のお気に入りが . . . と言つているがエヴァは気にせずに日本酒を飲む。

タカミチは近右衛門が仕事中にお酒を飲んでいたのを知り、（学園長の給料、カット出来ないかな？）なんて思つていて。はつきり言つてこの空間はカオスの極みである。と、その空間の中に . . .

「 雪。困つてゐるようだな」

「 いじからは儂等に任せとくれ」

突如2人の声がしたと思ったたら、空間に2つの亀裂が入った。

1つ目は天井から穴が空き、眩い光を背にして眼帯を着けた老人。神々の王オーディーンと、

2つ目の亀裂は床に走り、そこから全てを焼き尽くすような火柱と共に白いローブと長い髪を蓄えた老人。悪魔の王サタンが現れた。

「なつ！？なんなんじや お主達は！？」

「 つー！」

その2人の登場に近右衛門は懐に忍ばせていた自分の杖に手をかけ、タカミチはポケットに手を突っ込み即座に臨戦体制をとる。

(ああ、死んだな……これは間違いなく死んだな……)

それとは逆に、エヴァは2人から漏れ出している力を一瞬で見抜き抵抗する事を諦めた。

雪は事態に全くついてこれず、頭の上に?を2~3個浮かべている。

「こきなり出てきて済まぬ。儂等は雪の後見人のよつな者じや」

「別に争ひつもつは無いから落ち着いてくれ」

おじこちやんズは皆んなに交戦の意思はないと言え、近右衛門とタカミチは武器を下ろす。

その後にサタンが「座つてもいいかな?」と尋ね、近右衛門が頷くと、おじこちやんズは雪の隣に座つた。

「おじこちやん達、どうしたの?」

「雪が心配だつたから見ていたんだよ。

そしたら案の定困っていたみたいだつたから儂等が出向いたんだ。なに、ここから先はおじこちやん達に任せろ」

オーティーンは雪の頭を「シコシ」と少し強めに撫でる。

雪はその強さに頭を揺られながらも顔を綻ばせた。

タカミチや近右衛門、更にはエヴァ達までその光景にポカンと口を開けていた。

「騒がしくて済まないの。先ずは自己紹介から。  
儂の名はサタン。で、もう1人がオーティーンじや。  
名前で分かる通り、儂等は魔王と全能神じや」

「なつー？ サタンとオーティーンだとー？」

悪魔達を統べる王と神々の王が何故ここにいる！？」

流石に相手の力を一瞬で見抜いたエヴァも、まさか相手が魔王と全能神と思わなかつたのか驚きの声をあげる。

近右衛門は既に頭がフリーズし、タカミチは（意外とサタンって優しいんだね。ちょっと驚いたよ）なんて事を考えていた。

「まあ、驚くのも無理は無いが落ち着いとくれ。

その事も含めて、雪の事も、儂等の事も全てお話ししよう！」

サタンは混乱している踏を宥め席に着かせる。

皆さんも落ち着きサタンの言つた通りに席に着く。

「ありがとう。それではお主達の聞きたい事、知りたい事は何かの？  
答えられる範囲でなら嘘偽りなくお答えしよう！」

「分かりました。では最初に、そこそここの雪君は一体何者なのじや？  
その膨大な魔力量、明らかに異常すぎる！」

「雪の事かの？ 雪は……と、雪。君の事を伝えたいのじやが、いかの？」

「うん。いいよ、おじさん」

「分かつた。まず雪の事じやが、雪は

それからサタンは雪の事を話した。

雪がこことは異なる次元に存在する異次元の住人である」と。その世界で世界中の人々の不幸を一身に背負わされたこと。雪の降るクリスマス・イブの日にその一生を終えたこと。そしてサタンとオーディーンから力を貰つてこの世界に来たこと。その全てを皆んなに話した。

• • • • • • • • • • • • • • • •

それを聞いた皆は声が出なかつた。

雪の歩んできた人生はあまりにも悲惨だった。  
身体中を激痛に苛まれ、毎日が死の恐怖に怯える日々。  
そして余りにも早すぎる死。

世界を救うためとはいっても、雪は人柱にされたのだ。

「何故なんだ？」

すると、エヴァは絞り出す様に呟いた。

「何故なんだつ！！

何故お前は笑つていられるんだ！！

辛くないのか！？悲しくないのか！？

なんで・・なんでお前は・・・つ

エヴァは目に涙を浮かべて叫んだ。

それが同情なのか、それとも彼女の優しさなのか、

エヴァはまるで自分の事のように叫び、雪に詰め寄った。

「優しいんだね。エヴァちゃんは。

でも私は大丈夫。確かに、辛くない、悲しくないって言えれば嘘になる。

だけど私は私の人生に満足してるの。

お母さんとお父さんは私を沢山愛してくれて、おじいちゃん達は私を大切に思ってくれて、

そしてエヴァちゃんは私のために泣いてくれている。

それが私の幸せ。辛さも悲しさも全部押し流してくれる私の幸せなの。それで十分なの」

雪はエヴァを抱き寄せ、エヴァの頭を撫でる。

その光景はどこまでも優しく、どこまでも綺麗だった。

「ふ、ふん！別に泣いてなどおらんわ！」

ただ眠たくてアキビを咬み殺しているだけだ！」

恥ずかしさで顔を赤くしているのを見られたくないのか、エヴァは雪からソッポを向く。

「ああ……素直じゃないマスター……録画録画……」

「ひひボケロボーお前はなに撮つとるんだーーー。」

「あはは。エヴァちやん可愛い〜

「雪ーお前もなに言つてこるー。  
それとちやんを付けるなーーー。」

今までの重い空気は何所へやら……  
ガアアアアアつと呟えて茶々丸に掴みかかる。

「全く……騒がしいのう……」

「ほつほつほ。じやが、それもまた良いものじや。  
どれ、近右衛門殿。一杯どうじや?」

「おおーまさかサタン殿に酌をして貰つとはの……」

それを見ていた他の人達は酒を飲んでいた。  
サタンは近右衛門のお猪口に酒をつぐ。

「むおー？なんと言ひ皿をじやー？」

「これほど濃厚な味わいなのに水を飲むより瞬の奥に流れ込む

「オーディーンが神界から取つてきた神酒じやよ。  
儂もこの味が大変氣に入つとるのじや」

「これは儂の一生の思い出になるのう・・・  
おつと、サタン殿もどりつぞ

「おひ、済まないの」

サタンと近右衛門は互いに酒を飲み交わし酒の味に舌鼓を打つた。

「まつまつませ。向こうは楽しもつだな。

どひ、タカミチとやら。儂らも飲むとするかー！」

「い、いや・・・僕は遠慮しきりますよ・・・」

「なんだあー儂の酒が飲めないってかーー！」

対するタカミチとオーディーンペアはまるで会社の上司と部下のよ  
うなやり取りをしている。

「もしかしてもう酔つていますーー？」

「男なら細かい事は気にするな！」

それとチビチビ飲むよりも一気に飲め！ラップ飲みだ！」

「うふふー？」

オーディーンはタカミチの口に酒瓶をまるごと突っ込んだ。  
いわゆるラッパ飲みと言うやつだ。

タカミチは（明日は一日酔い決定だね・・・）なんて事を思いながら酒に飲まれていった。

それからはエヴァと雪も加わり軽い宴会状態になつた。

オーディーン曰く、ユグドラシルに実った黄金の林檎を使った果汁

そうして人類史上最も豪華な宴会は幕を閉じた。

~~~~~

「おほんつ。話しがかなり脱線してしまったの・・・」
好い加減話しに戻るとしよつ

宴会が終わった後、近右衛門が話しきり出す。
その瞬間みんなも顔付きを真剣なものに見える。
ちなみにタカミチは酔い潰れて寝てしまった。

「君の事はよく分かつてゐるが、改めさせて聞かせて貰う。

柏木
雪君。君はこれからどうするのじや？

君は 一体なにをやる? 世界で最も美しい園芸

私は

近右衛門の問いに雪は視線を逸らさずに

「生きる事です。この世界で私は精一杯生きてみたいです」

キッパリと、ハッキリと、生きたいと答えた。

「あいわかった！ それでは柏木雪君。君を麻帆良学園女子中等部2-Aに編入しよう。

改めてこの世界へようこそ。第一の人生を楽しんでくれ』

「はい！ ありがとうございます。」

雪は近右衛門の言葉に嬉しそうに顔を綻ばせた。

こうして柏木雪は麻帆良学園に正式に入学する事になった。

と、思ひきや雪はなにか氣まずそうな顔をした。

「ん？ どうしたんだ？」

「私……授業に着いてけない……」

「…………は？」

大変な事だと思つたエヴァは予想よりも対した事ない雪の言葉に？
を浮かべた。

「だつて私、学校一度も行つた事が無いんだもん。
体が大丈夫だつた時に少し勉強したぐらいで……
中学の授業に着いていけないよおおお……」

だが当の本人にとつてはかなり深刻な問題らしい。
雪は某ネコ型ロボットに泣きつくメガネの少年のようにエヴァに泣
きついた。

「ほつほつほ。安心するんじや雪。」

その程度の問題は杞憂に終わる

といひのがどういこ。いこには魔王と全能神がいる。

案の定サタンは解決策があるらしく、からからと笑う。

「ほ、本当？おじいちゃん？」

「こんな事もあるうかと魔界のある人物に頼んどつたのじゃ。雪の家庭教師をして欲しいとな。では早速呼ぶとしよう」

サタンが言つた瞬間、床に五芒星の魔方陣が広がった。五芒星は次第に輝きを増し、やがて魔方陣は綺麗な音をたてて割れた。

魔方陣が割れた瞬間、閃光が走り皆んなは目を瞑つたがすぐに光は収まつた。

皆んなが目を開けた時、そこには1人の人物が立つていた。その人物は・・・

「王。お呼びして頂き光榮至極で御座います」

長くもなく、短くもない黒髪。

180cmと割と高い身長。

20代前半と思われる若く、そして凛とした顔立ち。

一目見ただけでわかる最上級の燕尾服。

左耳に銀のモノクル装着して。

完璧で全く淀みの無い礼。

まさに執事という言葉をそのまま現したような男性だった。

「済まないの。急な頼みを引き受けてくれて」

「いえ、とんでも御座いません。

貴方様に初めてお願ひ事をされたのです。

それを断れば私一生の恥。地獄の業火に身を投じています」

「やう言つてくれると助かるわい。

して、今回お主に頼んだのはこの子の事ぢや」

「成る程……」お方が……

男性は雪に向き直りゆうべつと歩き出した。

そして雪の田の前まで歩くと膝を着いて臣下の礼をとった。

「お初にお田にかかります。

この度雪お嬢様の教育係をさせて頂きますマラクスと申します。
至らぬ点は多々御座いますが、全身全靈で貴女様にお仕えする所存
で御座います。

どうか直しくお願ひ致します」

「え、えと……直しくお願ひします……」

その余りにも常識外の挨拶に雪は少し戸惑っていた。

「マラクス……あのマラクスか！？

ソロモン王が従えた魔神の一柱にして30個軍團を率いる大いなる

伯爵。

【博識伯】の異名を持ち悪魔の中で最も賢いと言われている、あのマラクスか！？

「はい。その通りで御座います。

貴女様もかなりの博学なご様子ですね。

エヴァンジエリン様

「はい。その通りで御座います。

エヴァはマラクスの正体を見抜いて驚きの声を上げる。
それに対してマラクスはエヴァの見識に賞賛の言葉を述べながら完璧なお辞儀をする。

「このマラクスに雪の家庭教師を務めてもらひ。

それと身の回りの世話も手伝ってくれる。

期間は一ヶ月程じやが、必ず雪の助けになってくれるじやう。

儂が最も信頼する悪魔じやからな

「勿体無きお言葉で御座います。

それと短い間ではありますが宜しくお願ひ致します。雪お嬢様

「わ、私の方こそよろしく。マラクスさん」

雪とマラクスは改めてお互に挨拶を交わし握手をした。
だが雪はまだ少しだけぎこちなかつた。

「ふむ、一ヶ月か・・・

今は夏休みじゃから丁度いいのう。

雪君の勉強が終わつたら2-1-Aに転入させるとしようつかの。
そつじや、エヴァ。お主の所に雪君を住ませてははどうつかの？」

「ああ、別にいいや」

「ーーーー珍しきのう。

お主がここまで他人に心を許すとは・・・」

近右衛門は何気なく言つた言葉にエヴァが快諾した事に驚いた。
それと同時にここまでエヴァの心を許した雪にも驚いていた。

「なーーーーち、違うーーーー

雪の力に興味が湧いただけだから住まわせるんだ！

もしかしたらこの呪いを解く手掛けりがあるかもしれないからなーーーー！

その後の事は適当に寮に住ませる」

エヴァはそんな事を言つてこるが顔を真つ赤にさせていては照れ隠
しだと誰でも分かる。

「エヴァちゃんは本当は私と一緒に住むのは嫌なの？私って邪魔な
の？」

「前言撤回。分からぬ人物がいた。

雪は目をウルウルさせながらエヴァを見つめる。

「うやら雪は人の言つた言葉を真に受けてしまうからじこ。

エヴァの良心に見えない罪悪感という名の矢が次々と刺さる。刺さりまくって剣山のよつになってしまった。

「ちちち、違うんだ…」

さつきの[冗談であつて、決してお前と一緒に住むのが嫌な訳じゃない！

寧ろ一緒に住みたいくらいだ！」

「本当…？嘘…つかない？」

「ああ！勿論だとも！

一緒にお風呂に入りたいし、ベッドと一緒に寝たいくらいだから泣かないでくれ…な？」

「うん。エヴァちゃん…大好き…！」

エヴァの言葉に表情が180°変わつて満開の笑顔でエヴァに抱き

ついた。

エヴァも満更でもないのか、顔を真つ赤にしながら雪の抱擁を受け止める。

「ああ…顔を真つ赤にさせて…マスター…。
なんて可愛らしいので…」

…録画録画…」

「うひあああ…なに撮つとるんだボケ口ボオオオ…！」

茶々丸の行動に吠えるエヴァだが雪の抱擁によつて抜け出せなかつた。

こうして雪の第一の人生の初日はドタバタしながら過ぎていつた。

柏木 雪 麻帆良学園女子中等部2年Aに転入

麻帆良に入学しました！（後書き）

とうあえず初日は終わりです。
しばらくはオリジナルの話になりますがこれからも見てつけてください。

今回登場した執事のマラクスは黒執事のセバスチャンって言えば分かりますかね？

ハカラ カヤ ハセハカラ カヤ ハナダヌー。(漫書モ)

ムツヤベ . . . ムツヤベ | 話田来もした . . .
難産しました . . .
どうぞ見てこいつへだれこ . . .

エヴァちゃんはエヴァちゃんだよー

雪 side

「ん・・・」は・・・

そうだ。あの後私はエヴァちゃんの家でお世話になる事になつたんだ。

家に着いた後はエヴァちゃんと茶々丸さん、そして家庭教師のマラクスさんと少しだけお喋りして、そして寝たんだった。

「・・・・・・・・・・・・・・

このシチュエーション。私の中で分からぬナニかがこみ上げてきます。

まるで沢山の先人達が繰り返してきたような、強迫観念みたいなナニか・・・

私もそれに翻つて万感の想いを込めて言います・・・

「・・・知らない天井だ」

よしー転生した時の通過儀礼は無事終了です。

「これでようやく私も転生者になれた気がしました。

「さてと、これでもうやり残した物はないし . . . ん～～～。よく寝た～～～！」

私はベッドから上半身だけ起こしてグッと体を伸ばす。

今思えばこんなによく寝たのは生まれて初めてじゃないのかな？

前世では身体中に激痛が走って寝ては起きて、寝ては起きての繰り返しだったし。

あ、そう言えば咳をしただけで骨が折れた事もあったな . . .

そう思つたら私の前世って、もしかして壮絶な人生だつたのかな？

「 . . . 悩んでも仕方ないや。今は今的人生を楽しまないと」

前の人生を振り返つて少し気分が沈んだけど、悩んでも悔いても仕方ない。

起こつた事を考えてもうしようもありません。だつてもう起つた事なんだから。

それよりも今を、これからを考える事が一番大切なんだ。

私、こういうポジティブな考えをするのが得意なんだから。

大事なのは“これまで”より“これから” . . . つて、どこかの偉い人が言つていたような気がする。

「あ、もう朝なんだ . . 好い加減起きない . . . と？」

ベッドから出ようとした時に私の腰を誰かが掴んでいた気が付いた。

私はそつとベッドに居るもう一人の人物を起し「なによ！」
つくりと布団をめくつた。

すると、そこにいた人は……

「すう・すう・すう・すう・すう・むこむこや・や・や・

穏やかな寝息を立ててスヤスヤと眠るH・P・A・ちゃんでした。

「か・カワイイです・・・！」

なんだろ？・・・

小動物のように体をコロンと丸めて、見た目相応のあどけなさ。
見てる私まで幸せになるような無邪気な寝顔。

とても可愛いです！いや、かわいいです！お持ち帰ります！

「・・・・・・・・えい」

ふに・・・

ああーなんて柔らかいほっぺたなんだろ？！

「お前おつせになるような感触……たまらない……」

「…………えい…………えい…………えい…………」

「…………ふ…………ふ…………ふ…………」

「…………う…………う…………う…………」

「だんだん止められなくなってきた。私が突っついて度にエヴァちゃんの声はまた面白くなる。

それに運動してエヴァちゃんの寝息も面白くなる変わる。

「うが～～～…………めこめこ～～～…………」

「はーつこ夢中になつりました。

画面にからりついでこんな事して……反省です。

「でも毎ひつよつかな～…………起きよつて起きなこ…………せこなさせ起きせ起きなこ…………」

「エヴァちゃんの手は私の腰から一向に離す気がしない。

無理に引き離したらエヴァちゃんが起きつけつかもしれない、それはヤだなあ……

それにエヴァちゃんの手は私の腰から私の服をギュッと握り締めて

きた。

必死に私の服を掴むエヴァちゃんの姿はとても幼く、とても脆く感じた。

「 . . よしーそれならもつ一回寝ちゃおー」

こんな不安そうな表情で服を掴むエヴァちゃんの手を離す選択肢なんかない。

私はもう一度ベッドに横になつてエヴァちゃん包むよつて抱く。身長のせいもあって、エヴァちゃんの頭は私の胸にあたる感じになつた。

「あ . . エヴァちゃん . . あつたかい . . .」

私の胸から . . 腰から . . 体全体からエヴァちゃんの体温が伝わる。人つてこんなにも温かいんだ . . 初めて知つたよ . . . それに誰かと一緒に寝るのも初めてかもしない。

一度起きたにもかかわらず、私はエヴァちゃんの温もり感じながら目を閉じた。

side out

エヴァを抱きながら幸せそうに寝ている雪。

雪の腰に手を回して安心そうな寝息をたてるエヴァ。

ベッドで抱き合っている2人のその姿はとてもとても温かく、幸せ

で、見る者全てが安らぐ光景だった。

それはもはや一枚の絵画である。

モナリザだろうが、最後の審判だろうが、名だたる名画を何枚つんでも遠く及ばない程の。

おそらく教会とかで飾れば聖母画として崇められるだろ。2人の姿は一種の不可侵さを思わせるような神秘さだった。

「ああ・・なんという羨ましい光景なのでしょう・・・」

だがそんな事を知つてか知らずか・・いや、多分前者の方だろう・・・

エヴァの従者、絡繆 茶々丸は2人を熱い視線で見つめる。あまりに熱すぎて、視線はもはや視姦になつていてる。

「何をしているので御座いますか？茶々丸様」

と、そこへ雪の家庭教師のマラクスがやつてきた。
従者である茶々丸にも様を付けるのは流石と言つべきであろう。

「いえ、私はただ視姦をしているだけです」

マラクスの問いに茶々丸は堂々と答える。
てか視姦って言つちやつたよ。この人・・・
そんな堂々と言うものではないだろうに・・・

「さうだ、マラクスさんも手伝ってください。これ、カメラです」

どこから出したのか……茶々丸はカメラを取り出してマラクスに手渡す。

ちなみにこのカメラは、雪はまだ会っていないが麻帆良の超天才、超 鈴音お手製の高性能力メラ。

折角の技術がこんな形で使われるとは超 鈴音も思ってもいないうう……

「……朝一はん、作りたいのですが……」「…

だが、いくら悪魔であるマラクスでも犯罪の片棒を担ぐ事はしたくないのか、茶々丸の提案を渋る。

彼は悪魔である前に執事なのである。

「後で作れば大丈夫です」

だけどマラクスの言葉はたつた一言の元に却下された。

繰り返し言うが、茶々丸は視姦と言つ常識かつ世間的に完つ全アウトの事をしている。

それなのに何故ここまで自信満々な表情で言い切れるのか是非聞いてみたい。

「 . . . かしこまりました」

それに折れてしまつたマラクスは仕方なくカメラを受け取つた。
マラクスは茶々丸が満足するまでずっとシャッターを押し続けていたといつ . . .

エヴァ side

「う、ん . . . なんだ . . . 」この温かさは . . .

朝起きた瞬間、いつもと違う感覚を感じた私は目を開けた。
私の目の前にいたのは . . .

「すう . . . すう . . . ん~ . . . 」

穏やかな寝息をたてて、私を優しく抱きしめて寝る雪だった。
雪の手は私の肩を優しく抱き、私の頭は雪の胸に抱き寄せられてい
た。
私の肩から . . . 頭から . . . 雪の体温が伝わり、とても心地よく . . .
じゃない!!

(なつ、ななな、なんで私は雪に抱きしめられて寝ているのだ!?)

お、おおおお、落ち着くんだ私ー！

や無理だ！！ ゆっくりと深呼吸して冷静に、冷静になつて落ち着くんだ・・・イ

「… と言つて、なんで今まで雪の腰に手を回していいのだ！？」
2人で抱き合つてゐるその姿…

これではまるで私と雪が、恋人に

「」

そう思つた瞬間に私の顔は火が噴いたかのように熱くなつた。
違う・違うんだ・私は断じて、その・・・女と女が愛し合う

持つておらんのだが

「…………いいい…………ものだな…………」

人の温もりなど久しく感じていなかつた。

こうして人の温もりを感じるのも悪くはない。

「

そう思つたと同時に、何故私が人の温もりを久しく感じるのか分かつた。

吸血鬼

今は失われた技法を使って人を遙かに超えた存在。
他者の生き血を吸い、自らの糧とするソレはもはや化物と呼ぶに相応しい。

人は理解の及ばぬ存在を排斥する。

当然私も例に漏れる事なく人々から排斥された。

成長することのないこの体では一つ所に留まることは出来ない。
私が吸血鬼と判れば皆は私を討ち滅ぼそうとしてきた。 昨日まで優しく接してきた隣人であつてもだ。

だから私は人々との関わりを絶つた。

温もりを捨て、血と死と悪意が支配する世界を選んだ。
だが、その捨てた筈の温もりを私は今感じている。

怖い

この温もりが壊れる事が・・雪に拒絶されるのが怖い。

私が吸血鬼だと知つたら雪はどうするのだろう・・・

もちろん私を化物とつて拒絶するに違いない。

これまでもそうだったのだ、これからもそうに決まっている。

ならば吸血鬼であることを黙つているか？

いや、駄目だ。どんなに巧く隠しても確実にバレる。

なにより学園の“正義の魔法使い”が黙つていないだろ？

ギュッ

私が化物だとバレた時を想像した瞬間、朱に染まっていた顔が一気に青ざめた。

必然的に雪を抱き締める力も強くなる。

「ん～～・・・あれ？エヴァちゃん？・・・おはよう～」

それに反応したのか、雪は間延びした声を出しながら田を見ました。
それと同時に私の頭を撫でてきた・・・

「あ、ああ・・おはよう・・・」

いつもだつたら恥ずかしさで顔を真っ赤に染め上げているが、今はそんな余裕はない。

私は雪の言葉に力なく返事する。

「おはよう御座ります。」

雪お嬢様、エヴァンジエリン様。朝食の準備ができております。下に降りて召し上がれますか？それともお運び致しますか？」

と、そこへ、雪の家庭教師のマラクスがやつてきた。
いつ見てもこいつの作法は完璧だな。
動作に全く淀みが無い。

「あつがとうマラクスさん。朝食は下で食べます。
行こっヒヅヤサヤン」

雪は私に屈託の無い笑顔を向けてくる。

そういうえばマラクスは悪魔だったのだな。
それなのに雪は何も気にせず普通に接して
もしかしたら私が吸血鬼だと知つても雪は

「ああ…行くとするか…？」

雪は…私を拒絶しないでくれるだろうか…？

私を受け入れてくれるだろうか・・・?
なあ雪・・・私を嫌わないでくれるか?

雪 side

「うわあ・・・スゴイ・・・!」

マラクスさんに朝ごはんの準備が出来たと呼ばれて一階に降りてみたんだけど目の前に置いてあつた料理はスゴかつた。焼きたてなのか、パンからはバターのいい匂いが香って、目玉焼きは私の大好きなトロトロ半熟。

スープはキレイな黄金色をして、「ンソメのいい香りがパンの匂い」と合わさって食欲が刺激される。

「これマラクスさんがつくったの?」

「いえ、私だけでは御座いません。

茶々丸様にも手伝っていただきました」

「そんな・・・私はただマラクスさんの指示に従つただけです」

「ううん。そんな事ないよ! 2人ともスゴイ!」

こんなに美味しそいなご飯をつくって本当にスゴイよー!」

私は2人の料理の上手さにピヨンピヨン飛び跳ねて喜ぶ。
だって本当にスゴイんだもん!!

「あ・・ありがと「」」

「お褒め頂き光榮で御座います」

そう言つてマラクスさんと茶々丸さんはイスに座らず、私とエガア
ちゃんはイスに座つて・・あれ?

「なんでマラクスさんと茶々丸さんはイスに座らないの?」

イスはちゃんと4脚あるのになんで2人は座らないんだろう?
それに、よく見たら「」飯は2人分しかない。

「私にとつて飲食はフェイクなので必要ありません」

「私も飲食はできますが必ずしなければいけない事ではありません
ので・・・」

2人は、さも当然といった感じでそんな事を言い出した。

「ダメつーーー」

もちろん私がそんな事を許すはずがない。
私は大声をだして2人の言葉を否定する。

「2人とも食べる事が出来るならちやんと食べなきやだめっ！！
私とエヴァちゃんだけがご飯を食べて、マラクスさんと茶々丸さんは見てるだけなんて・・・
そんな寂しい事認めないんだからーーー！」

「しかし・・・私が皆様と同じ食卓を囲む訳には・・・」

マラクスさんはまだそんなつまらない事を言っている。
イケナイ・・・イケナイよ・・・

「マラクスさん・・・私・・・怒るよ・・・？」

私は笑顔で・・・それはもう満面の笑みでマラクスさんに語りかける。
もちろん、まだ怒つていなじよ？
ほら、笑顔笑顔（

「つー！・・・か、かしこまりました！
一分で調理して参りますーー！」

マラクスさんは慌てながら台所に向かっちゃった。
一体どうじけやったんだろう？

あまり急がなくていいんだよ？

この雪の笑顔を見たマラクスは後にこう語った

雪お嬢様を怒らせてはならない
・

憤怒の魔王を見る事になる　』と・・・

~~~~~

「それじゃあ McConnell さんで、いただきますー。」

マラクスさんがすぐにご飯を用意して、私達は挨拶を言つた。  
ちなみにマラクスさんは約束通り一分で2人分のご飯を作つちゃつ  
た。

やつぱりマラクスさんはスゴイなあ・・・

「はむはむ・・・んう～～～美味しいい～～～！  
マラクスさん！」のパンとっても美味しいよーーー！」

「恐縮で御座います。ですがこれ程いい食材があつて始めての味で御座います。

茶々丸様。この食材達はどこで仕入れているのですか?」

「食材は駅前の商店街で全て買っています。」

あと、八百屋は土曜日の朝9時に、

精肉店は日曜日の朝11時からタイムセールをやっています。

お買い得です」

「ふむふむ……八百屋は土曜の朝9時……精肉店は日曜の朝11時にタイムセール……と。

貴重な情報ありがとうございます」

マラクスさんは茶々丸さんの言葉を次々とメモしていく。

これが某『兵』や某正義の味方が言われてた“主夫”って言つやつなのかな?

「そうだ、等価交換……と言つ訳ではないんですが、私に料理の御指南をお願いできますか?

マラクスさんの技術は田を見張るものがあります」

「そう言つて頂けるのは光榮で御座います。

私の拙い技術で宜しければご伝授させていただきます」

マラクスさんと茶々丸さんつたらもう仲良くなつちやつてる。

皆んなでご飯を食べる事がこんなにも楽しい事だつたなんて……前的人生じや、ご飯を食べる事すら出来なくて、ずっと点滴で体に栄養を送つていたから、こうやって皆んなで楽しくご飯を食べる事が出来るなんて前的人生じや味わえなかつたよ。

「…………」

ダメダメ！

**ネガティブ思考禁止！！**

前の人生は忘れちゃダメだけど、ネガティブになるのもダメなんだから。

ポジティブに・・・ポジティブに考えるんだ私。

「2人のご飯とっても美味しいね。エヴァちゃん」

このネガティブ思考を振り払つたためにH・ヴァちゃんに話しかけてみる。

卷之三

「だけどヒガアちゃんは私の言葉に答えてないから上のK。」J飯もあり手を付けてない。

な？ そういえば、わざわざあまり喋っていなかっただし、とにかくいたのか

それに私の顔をすこと見て……

「ハカラタケル? はい、ハカラタケル?」

「んあ？ああ・・・どうしたんだ？」

「エマしたんだ?。じゃなこよ。  
わからずつと上の空。」飯もあまり手を付けないで  
どうか体調悪いの?」

「いや、エリも不調はない。心配するな」

エヴァちゃんはそれだけ言つて、また何か考え込んでじやつた。  
今は何を聞いてもエヴァちゃんは答えてくれそうにないから私は食  
事を続けた。

一体どうじやつたんだろう?

## エヴァ side

朝食の時間が終わり、マラクスと茶々丸は後片付けの最中だ。  
雪は美味しいと言つていたが私には全く味が分からなかつた。  
雪はロボットである茶々丸にまじで飯を食べるよつて言つたのだ。

『そんな寂しい事認めないんだからーー』

』

と言つてな。

全く . . とんでもお節介で . .

超が付くほどのお人好しだな . .

(だが . . 悪くはないな . . . . . )

でもそれが雪の良いところだ。

その誰もを気にかける優しさ・・人によつてはその優しさを利用する者もいるだろう。だが、分け隔てなく接するその純粋無垢な優しさが私は好きだ。私の心を温めてくれる。

( · · 雪なら · · きっと · · )

雪なら · · きっと雪なら、私が吸血鬼だと知つても · ·

「なあ雪 · · お前に · · その、話したい事があるんだ」

私は意を決して雪に自分の正体を話す。  
吸血鬼である事を · · 化物である事を。  
人から忌み嫌われた呪われた生物である事を。

「ん? なあに?」

「実はな · · 私の正体は · · 吸けつ

『この化物めつづーーー』

「…………？」

私の正体を話そうとした瞬間、過去の記憶がフラッシュバックしてきた。

憎悪がこもった怨さの声。

恐れが宿つた嫌惡の眼。

幾度と私に向けられてきた刃物のような感情。

その記憶が私の頭の中を駆け巡ってきた。

『　この呪われた存在めつ……』

『　あんな化物が私の隣に潜んでいたなんて、なんと恐ろしい！…』

『　人の生き血を啜るとは、おぞましい奴！！』

『　皆んな武器を取れ！あの化物を打ち滅ぼすんだ！！』

『死ねつ！死ねつ！死ねつ！死ねつ！死ねつ！死ねつ！死  
ねつ！死ねつ！死ねつ！死ねつ！死ねつ！死ねつ！死  
！死ねつ！』

「…………っ」

その記憶を思い出して私は自分の服を握り締めた。

怖い……

もし雪にあんな表情を向けられたら私はどうすればいいのだ？

どうする . . .

やはり私の正体を話さない方が . . .

( . . . いや、なに弱気になつていてる！

雪に私の正体を話すんだ！－！)

私の中にいるもう一人の私が、自分の心に觸を入れて意思を奮い立たせる。

そうだ、もしこのまま私の正体を黙つても、それがバレタ時に雪を傷付ける事になる。

雪に拒絶されるのは辛いが、雪を悲しませるのはもつと辛い。

私は内から湧き出てくる恐怖心を無理矢理押さえつける。

「私は . . . 私は、本当は吸血鬼なんだつ－！」

言つた . . . 言つてしまつた . . .

賽は投げられた。もう引き返す事は出来ない . . .

怖い、怖い、怖い、怖い、怖いつ！

心臓がバクバクと動悸する。嫌な汗が流れてくる。

雪は . . . 雪は私をなんと言つのだろう . . .

「 . . . うん？ . . . うん、そなんだ . . .

話したい事つてそれだけ？」

・・・・・は？

それだけ？って・・私が必死の思いで言つたのに、それだけ？って・

私の身を裂かれるような叫びは、なんとも軽く呑氣な声で返されて  
しまつた・・・

「ちよつ・・・ちよつと待て！

吸血鬼だぞ！？私は吸血鬼なんだぞ！？

吸血鬼ぐらい雪も知つていいだろ！？！

「もちろん知つてるよ。

何言つてるのヒヴァちゃん？」

・・・・・おかしい。

「いやで自然に返されると私のほうが間違つてこらぬがしてへる・・

私をずっと縛つてきた呪縛が歯牙にもかけられないなんて・・・

「知ってるなら . . . つ

知っているのなら何故いつも通りに笑っている！？

吸血鬼だぞ！？怖くないのか！？

いつもと違う反応に焦ったのか . . .

それとも“悪”であろうとする意地なのか . . .

私は私でもよく分からぬ感情に叫んだ。

「怖い？なんでエヴァちゃんを怖がらなくちゃいけないの？  
エヴァちゃんは全然怖くないよ」

「そんな筈ない！だつて . . .  
だつて私は . . . 化も

「エヴァちゃん！」

突然、雪が私の言葉を遮つて抱きついてきた。  
雪は私を優しく . . . そして泣きそうな表情で私を抱きしめてくれた。

「エヴァちゃんは怖くない . . .  
エヴァちゃんは化物なんかじゃないよ . . .  
そんな事言っちゃいけないよ . . . つ

「でもつ . . . でも私は人の生き血を吸う生き物だし . . .  
何より私は人を殺したのだぞ . . . !

そうだ . . . 私は人を殺したのだ。

吸血鬼になつてから数百人 . . . いや、もっと殺したかもしけん。

全ては賞金稼ぎの連中だつたが、少なくとも私をこの呪われた存在にした奴は憎しみを以つて殺した。

「私は . . . 私の手は血で染まりきつている . . .

そんな私でも、お前は怖くないのか？恐ろしくないのか？」

「 ハグアちゃんはハグアちゃんだよ」

それを聞いても雪は私を離さない。  
寧ろ抱きしめる力を強くする。

「 . . . ほら聞こえる？

私の心臓、トクントクンつていつていいる . . .

エヴァちゃんは感じる？私の心臓の音 . . .

『 . . . トクン . . . トクン . . . トクン . . .

感じる . . .

確かに雪の心臓の鼓動を感じる。

決して大きい鼓動ではない。だが私の体の芯まで響きわたる。

「ああ、感じるや . . .

私の胸から、雪の小さい鼓動が . . .」

「うん . . . 私も感じるよ . . .

エヴァちゃんの心臓がトクントクンつていつているのを感じるよ . . .

とても小さくて . . . とても温かい鼓動が . . .」

雪の鼓動を感じじる度に私の中にあるナニかが音をたてて崩れ去る。  
まるで私を囲う檻の格子が一本一本砕けているみたいだ。

「私の右胸がエヴァちゃんの鼓動を . . . エヴァちゃんの右胸が私の  
鼓動を感じている . . .

人間とか人間じゃないとか私には難しい事はよく分からぬいけど . . .  
こづしてお互いに抱きあって . . . 胸の鼓動を感じて . . . 体温を感じ  
れる . . .

それだけでいいんじゃないかな?

私の鼓動を感じているエヴァちゃんは化物なんかじゃないよ。  
こんなにも優しくて、こんなにも温かいエヴァちゃんが化物な訳な  
いじゃない。

私は

私はエヴァちゃんを受け入れるよ」

その言葉を聞いた瞬間、なにかが決壊した。  
これが・・これが私の捨てた・・・  
そして私が願っていた人の温もり・・・  
ようやく・・ようやく私は誰かに受け入れられた・・・  
人々から忌み嫌われた私を、雪は受け入れてくれた  
・・・

「本当に・・・私を受け入れてくれるのか?  
嫌わないでくれるのか・・・?」

「うん、私はエヴァちゃんの全部を受け入れるよ。

だから……泣きたいときは泣いていいんだよ……」

「うう……うわあああああああああんー！」

辛かったつ……寂しかった……つ

そして怖かった……つ

雪に拒絶されると思うと……怖くて怖くて仕方なかつた……つ

まるでダムが決壊したかのように私は泣きまくつた。  
今まで溜まってきた色々なものが私の目から流れてくれる……

「うん……うん……

私はエヴァちゃんを拒絶しないよ……

ずっと……エヴァちゃんのそばにいるよ……

雪も涙を流しながら私を一層強く抱きしめてくれた。  
雪の一言一言が私の心に染み渡る……

雪の体温が私の中にある氷塊を溶かしてくれる……

「ぐすり……なあ雪……入ってこんなにも温かいのだな……」

「うん、そうだよ……

人はとっても温かいんだよ……

それから暫りくの間、私が泣き止んでも雪は私を抱きしめてくれた。

この温もり・・例え何者であれつと、壊すのなら私が悉く粉碎して  
みせよう・・・

汚れを知らぬ純白の雪は私の手のひらで静かに守るつ・・・  
私は静かに、そして秘かに雪を守る決意を固めた。

~~~~~その頃~~~~~

「マスターと雪さんが抱きあつてゐる・・・
なんと素晴らしい光景でしょう・・・
でも少し羨ましいです・・・
あ、録画録画・・・」

「やはり雪お嬢様は素晴らしいお方で御座います。
なんと微笑ましい光景なのでしょう・・・」

雪とエヴァが抱きあつてゐる姿を録画しているロボットメイドと、
微笑ましい視線を送る悪魔執事が居たとか居ないとか・・・

HugアチャーカンパニーHugアチャーカンパニー（後書き）

皆さんに質問なんですが、一応マラクスは一ヶ月経つと帰ります。
そこで皆さんマラクスをこのまま帰すか、留まるかアンケートをお願いします。

その結果次第ではストーリーに少し変化があります。

1、帰る

百合成分が濃厚になります。

百合の園が咲き誇ります。

でもメインはやっぱりHugアングリーン

2、留まる

百合にプラスして雪がノーマルな恋愛をします。

でも相手はマラクスではありません。

ノーマルな恋愛が成就するのかしないのか・・・

それは作者にもわかりません。

受け付け期間は10月15日までです。

意見がなければ作者が勝手に決めます。

それでが皆さんドシドシと、ドバッとお願いします。

待つてま～す(^〇^) -

誤字修正しました。

あとアンケートに関してですが補足です。

1番のすぐ帰る、ではマラクスが永遠に出でこないと想われる方がいらっしゃると思いますが、

1番の、マラクスは帰ったとしても、永遠に出でこない説ではあり

ません。

学園祭とか、その他諸々のオリジナルイベントでちょくちょく出で
きます。

ただ、1と2の違いはマラクスが原作キャラとあまり関わらないく
らいでしうか . .

2の場合はマラクスも原作キャラと色々と関わりを持ちます。ただ、
恋愛はしませんけどね。

マラクスの扱いの違いはそんな所です。

それともう一つ。

1番と2番では百合百合するキャラ数が若干変化します。

2番の方はノーマルな恋愛が入るので、必然的に1番より百合百合
する人数が1~2人くらい減ります。

説名下手ですみません . .

登校地獄ですか？解説できますよ？（前書き）

な . . 長かつた . . .
今まで書いてきた中で一番長かつた . . .
それではどうぞ . . 。 (がく

登校地獄ですか？解呪できますよ？

エヴァ Side

「…むむむむむむ」

ん
・
・
・
またか
・
・
・
・
・
・
・

雪がこの家に来てから馴染みの感触に私は目を覚ました。

卷之二

量被の比は取っかじさて顔を真示にしていかが一過間経た

慣れとはおそろしいものだな

といつても、やはつ少し恥ずかしいがな。・・・

「さてと……もつ少しだけ、」この感触を味わうか……。

シナリオ・ノンノ・アーティスト

雪の肌の感触・雪の体温

その全てが私は大好きだ。

私がもう無理だと思つて捨てたつもりだ。

「んふふ……やはり雪は温かいな……」

私は雪の胸に顔をつづめて雪を感じる。
嬉しさで思わず顔が綻んでしまつ。

ああ……これが幸せといつものなのだな……

「ん~……んにゅ?……あ、おはよウヴァちゃん……」

しづらしくやつしていると雪が田を覚ました。

起きたばかりで、しょぼしょぼさせた田をじかる姿はとても愛らしく
い小動物のようだ。
と言ひか……仔犬の耳と尻尾が見えるぞ……

「ああ……おはよウ。雪」

「ん~~~……」

その犬耳と尻尾に抗う事ができず、私は雪の頭をなでなでする。
雪はとても嬉しそうにして満開の笑顔を咲かせた。
おお……尻尾がパタパタと動いている……
気持ちいいのだな……よしよし、もつとなでなでしてやれり……

「雪お嬢様、エヴァンジエリン様。」

お楽しみのところ申し訳御座いませんが、起床の時間で御座ります

む、マラクスが来てしまったか . . .

この幸せの一時が終わってしまったのは実に残念だが仕方ないな . .
私は名残惜しさを我慢して雪の頭から手を離し、ベッドから降りる。

くつ . . 雪の温かい感触が手に残っている . . .

「マラクス、お前はいつも時間ピッタリに動くのだな . .
少しは好い加減になつてもいいんじゃないのか?」

私は幸せの一時を止めたマラクスに少しイヤミを込める。
だって仕方なかろう . . 雪のあの気持ち良さそうな表情 . . 見てる
こっちも心地よい。

あと5分 . . あと5分は雪の頭をなでなでしたい . . . つー

「H'ガアちゃん、そんなこと言つちやダメだよ。
マラクスさんはしつかりお仕事してるんだから

そんな事を言つてると雪に怒られてしまった。
だが全くと黙つていいいほど迫力がない。
寧ろとても可愛らしい . . .

「むう・・だ、だがな・・・」

「せいかひ、早くトコおいつよ・・・

「飯が冷めちやうよ?」

「ま、待ってくれ雪。1人で歩けるから手を引つ張るな」

私が答えるよりも早く、雪は私の手を引つ張つて階段を下りる。
全く雪はバタバタと慌ただしい・・・
だが、悪くないな・・ああ・・本当に悪くない・・・
これが“田舎”といつやつなのだろう・・・

「　　よし、今日も幸せの“田舎”を始めよつ・・・」

私の呟きは誰に聞こえることなく朝田の光にとけて消えた。
さてさて・・今日の朝じはんは何だうつな?

雪 s.i.d.e

「くそくん・・あ、この匂いは・・・」

一階に下りた途端に懐かしい匂いを感じとった。

私はこの匂いを知っている・・

外国の食材には決してない独特な香り・・・

私がまだちゃんとしたご飯を食べられた時に何度も味わったお馴染

みの料理 · ·

それは · · · ·

「 お味噌汁！－！」

そう。田本の食卓に絶対に存在する田本料理 · · 外国ではミソスープと呼ばれているお味噌汁。

それと白くてホカホカのお米とこんがりと焼き上げた鮭が並んでいた。

「わあ！今日の『』飯は和食なんだ！」

懐かしい料理を見て思わず私は喜びで飛び跳ねた。
だって本当に懐かしいんだもん！

前的人生ではちゃんとしたご飯を食べたのは十数回くらいしかなかつたし、H・V・Aちゃんの家は今まで洋食だけだったし、本当に懐かしい！

「 · · ふむ、和食をお出しだすれば雪お嬢様が喜ぶと茶々丸様が仰つ
ていましたが · ·
どうやらその通りみたいですね。
流石で御座います、茶々丸様」

「やっぱ『』れもマラクスさんが作ってくれたの？」

「いえ、残念ながら私は和食の知識は殆どありませんので…
今日は茶々丸様が全てお作りになりました」

「本当…？茶々丸さん…？」

「は、はい。ここ最近は洋食しか作っていなかつたので、和食を作
れば雪さんが喜んでくれると思つて…」

「うん…本当に嬉しい！
ありがとうございます茶々丸さん！」

私は茶々丸さんの手を握りながら喜んだ。

うん？茶々丸さんの顔が真っ赤になつてているけどどうしたんだろう？

「あ、ありがとうございます…」やこします…（なでなで

「えへへ～～

茶々丸さんは少し戸惑いながらも私の頭を撫でてくれた。
ん～…・・・気持ち～よ・・・・

「雪お嬢様。料理が並べ終わりました。
わわ、ビーフチャウスにお座りください」

「あ、は～い」

「あ・・・・・」

「マラクスさんに呼ばれて私はイスに座る。
茶々丸さんは寂しそうな声を出していた・・・
うーん・なんか悪いことしちゃったかな・・・
・・・・・・そうだ！」

「・・・またあとでなでなでしてね」

「へへへへつづー!?」

私は茶々丸さんの近くに戻つて、茶々丸さんの手を私の頭の上に置いて、にぱあっと微笑む。
さつきよりも顔を真つ赤にしているけど茶々丸さんどうがしたのか
な?

「は、はい・・・・・わかり・・・ました・・・あとでまた・・・・・」

「うん またあとで」

なんで顔を赤くしているのか分からいけど大丈夫そうだね。
私はイスに座りなおして数年ぶりに箸を握つた。
うん、この箸を握る感じもとても懐かしいなあ・・・

「エヴァちゃん、茶々丸さん。2人とも早く早く」

私はまだ座つていない2人を手招きする。

お米・お味噌汁に焼き魚・数年ぶりの和食・・・楽しみだなあ

・

茶々丸 side

「……………」

私は先ほど雪さんの頭を撫でた手を見つめた。

雪さんが喜んでくれると思って和食を作つてみたら、案の定雪さんはとても喜んでくれて私に笑顔を向けてくれました。

あの笑顔が世に言う“満開の笑顔”が咲いた”というのでしょうか。
その笑顔をみたら何故か私の手は雪さんの頭を撫でてしましました。
最初は失礼な事をしてしまったと焦りましたが、雪さんは嫌な顔1つせず、寧ろ幸せそうな表情をしてくれた。

しばらくそうして雪さん頭を撫でていたらマラクスさんに呼ばれて
雪さんは私の手から離れてしまいました。

その瞬間私の胸から変なノイズが発生して、私は私でもよく分から
ない気持ちに声を出してしまった。

私には感情と呼べるものは無い筈なんですが、あの時の気持ちは“寂しい”という感情なのでしょうか？私にはよく分かりません・・・

その声を聞いた雪さんはトテトテと可愛らしい音をたてて私の耳の

前まで戻ってきて私の手を握つて自分の頭に置いて

『…………またあとでなでなでしてね』

と、言つて微笑んんでくれました。

さつきから私の胸にある駆動モーターが熱くなっています。この温度の上昇はなんでしょうか?どこか不具合があるかもしれません。あとで葉加瀬さんにメンテナンスをお願いしなければ . . .

そのあと櫻ちゃんはまたトテトテと可愛らしげに音をたててイスに戻りました。

私の映像視野にある筈のないものが
あれ?

「あの……マスター……」

「ん？ なんだ？」

「バグでしょうか……雪さんから仔犬の耳と尻尾が生えているよう

そう。さつあから雪さんの頭とお尻から仔犬の耳と尻尾が生えて
るのです。
しかもピロピロと可愛らしく動いています。
口ボットの私が幻覚を見るなんて . .

“ひつやうり縦メンテナンスが必要みたいですね。

「いや、バグなんかじゃないだ。

そつかそつか……お前にも見えるよくなつたか……」

「“も”という事は……もしかしてマスターも……」

「ああ、見えいるだ。雪と初めて会つた日からな。

どうだ？・・パタパタと忙しなく動いて……とても可愛いだらう

？」

そう言つとマスターは温かい・・それでいて、どこか誇りしげな表情で微笑む。

確かにパタパタと尻尾を振つてゐる姿はとても可愛らしげです。これに異を唱える人はこの世に存在しないでしょ。

「はい。マスターの言つとおつとても可愛いです。」

「ふふ、やうだらうそうだらう。とても可愛いでだらう。

おそれくあの耳と尻尾は雪に一足以上の感情を抱くと見えるよくななるのだらうな。

雪に対する想いの一種のバロメーターと言つたといふか

「もつとも、その感情がなんの感情か分からんがな」と、付け加えてマスターは雪さんに視線を向ける。

マスターの言つて定以上の感情とは一体なんなのでしょうか？

友情？いや、友情を悪く言つつもりはありませんが、そんな軽い感情ではありません。

ならば信頼？違う。わたくしの友情より遠ざかつてしましました。

私のデータベースにある言葉で最も近い言葉は“親愛”といつ言葉でしょうか。

何れにしても“感情”がインプットされていない私ではその答えは分からぬでしょ。

「　　エヴァちゃん、茶々丸さん。2人とも早く早く」

そんな事を考えていると、まだイスに座っていない私とマスターを雪さんが手招きして呼んできました。
雪さんをお待たせしてはいけません。

「マスター、早くいきましょ」

「ああ、やうだな」

私とマスターはすぐにイスに座る。

今まで食卓に着くことなど無く最初は戸惑つていましたが、今ではすっかり慣れ、逆にこいつしていないと落ち着きません。

雪さんがこの家に来てから何もかもがガラリと変わりました。もちろん良い意味で。

マスターは本当に幸せそうな表情をして、私もこの何でもない日常がとても充実しています。おそらくこれが“幸せ”というものなの

でしょ♪

そのあとは皆んなで美味しい「」飯を食べました。

マスターが「魚の骨が喉に…う！」と、言って慌てたり、
マラクスさんは「箸とは…どのように持つのですか？」と、【博
識伯】とは思えないような事を言つたり、

雪さんは「ほかほかのお米~」と、見てるだけでも嬉しくなりそうな表情で「お食事を食べて・・・」
騒がしくも楽しい朝だったとして幕を閉じました。

エヴァ side

「あ~~~~~・・・暇だ~~~~~・・・・」

朝ごはんが終わつた後、私は何も置いていないテーブルに突つ伏した。

「Jの時間帯はいつも暇だ。

茶々丸は食器など、後片付けをしているから今はこの場にいない。雪とマラクスは中学の勉強に着いていけるように勉強の真っ最中だ。私は家事など真つ平御免だし、雪の勉強に混ざりたくもない。15年間もこの学園に縛り付けられているのだ。今さら勉強しても同じ内容を聞くだけで苦痛にしかならない。

私は仕方なしに雪たちの勉強風景を見てみる。

まあ、何もしないでテープルに突っ伏すよりはマシだらう・・・

「 公倍数とは2つ以上の整数の共通する倍数の事を言います。例えば、2と3の場合は6、12、18・・・と続きます。それを踏まえて最小公倍数といつのは公倍数の最小の事を指し

」

「 (かきかき)

雪たちを見てみると、マラクスの授業を雪は真剣に受けて、一言も発せずノートに黙々と書いていく。

今は小学5年生程度の授業か . . . うむ、真面目なのは良いことだ。頑張れ頑張れ。だが私は暇だ . . .

「 マスター、如何なさいましたか?」

すると、後片付けが終わったのか茶々丸が戻ってきた。よし、これで少しばは退屈が紛れる。

「 茶々丸か . . . なに、やる事もなくて暇してるんだ . . . 」

「 暇 . . ですか . . . それならば読書などないかがですか?たしか、マスターが読んでない本も沢山あつた筈です」

「ん〜〜〜だが本は別荘に全部保管したしメンンド〜〜まで、
その手があつたか！！」

別荘と聞いた瞬間、とてもいい事を思いついた。
そうだ、私には別荘があつたではないか！
すっかり失念していた！！

「 もうと、ひとまず！」ド中断して一回休憩をいれましょう
「はい。ん〜〜〜〜〜！」

「どうやら雪たちも休憩に入ったみたいだな。丁度いいタイミングだ！」

「雪ー・マラクス！今から別荘にいくぞーー！」

私は2人の目の前に立ち、堂々と宣言した。

「べ・・・別荘・・・・・？」

「そりだー！いま私はとても暇だ！
よつて今から私たちは別荘に向かうー。
雪もマラクスも一緒に来いー！」

「 . . . こまでも堂々と言わると逆に清々しく感じますね . . . 」

マラクスがなんか言つてゐるが関係ない！

私は暇で暇で死にそなのだ！まあ不老不死だから本当に死にはせんがな……

「細かい事は後だ！ともかく別荘にいくぞ……」

そして私は階を引き連れて地下へと下りて行つた。
ふふふ……別荘を見たらきっと雪は驚くだらうな……
とても楽しみだ……

エヴァちゃんがいきなり「別荘にいくぞ！」て言つたから地下に下りてみたけど、地下はお人形の山とよく分からぬ謎のビンが転がつてとても散らかっていた。

エヴァちゃん……ちょっとだらしないよ……

「さてと……久しぶりに別荘を使うな……
どこにしまったかな……」

ポイ。ポイ。ポイ。……

雪 side out

エヴァちゃんがいきなり「別荘にいくぞ！」て言つたから地下に

そんな散らかり具合の状態でも気にせず、エヴァちゃんはお人形の山に手を伸ばして次々とお人形が宙に舞う。

う . . . あんな無造作に扱つていたら、いつかお人形たちに呪われそ
南無南無

ヨオ、御主人。ズイブント久シブリジヤネー力」

心の中で合掌していると、聞き慣れない声が聞こえた。
どうやらエヴァちゃんが手に持っているお人形が声の正体みたい。

「む？ チヤチヤゼロか？ どうしてこんな所にいるのだ？」

「オイオイ・御主人ガコノ地下一置イテイツタンジヤネー力。
ズイブント長クホツタラカシニシヤガツテ。
ミロヨ、コンナニ埃ガツイチマツタジヤネー力」

「 そ う か そ う か 、 そ れ は 悪 い 事 を し た な 。 そ れ よ り も 今 は 別 庄 だ 。 い つ た い 何 所 に し ま つ た の だ ? 全 然 見 つ か ら んぞ ． ． ． 」

ボイ。

「アーレー」

茶々丸さん似のお人形、チャチャゼロちゃんが文句を言つけど、エ

ヴァちゃんは言葉だけの謝罪を言って別荘探しに戻っちゃった。
そうなると必然的に他のお人形たちのように、チャチャゼロちゃん
もエヴァちゃんに投げ飛ばされて宙に舞つ。

「…………（ぱく）

チャチャゼロちゃんの軌道はまるで狙いましたかのように私に向
かつて飛んできて、私の胸にすっぽりと収まっちゃった。

「……大丈夫？」

「オウ。ツタク御主人ノヤロー……ツテ誰ダオメエハ……？」

「私？私は柏木 雪。エヴァちゃんの家に住んでる。よろしくね」

「フーン、ソウカ……オメエガ馬鹿ゲタ魔力ノ持チ主力……スゲ
エ魔力量ダナ……
オレハ、チャチャゼロツテイウンダ。ヨロシク頼ムゼ。
デ、モウ一人ノ奴ハ誰ダ？」

「私は雪お嬢様の家庭教師を務めさせていただいておりますマラク
スと申します。」
以後、宜しくお願ひ致します。チャチャゼロ様

私たちとチャチャゼロちゃんはお互いに自己紹介する。
うん。言葉は少し悪いけどチャチャゼロちゃんはとてもいい子だ。

「やつだ、埃ほりつてあげるな」

私はチャチャゼロちゃんに着いている埃をほりつ。

うわ・・けつこうスゴイ量・・・

本当に長いあいだ放つたらかしにされてたんだ・・・

「はい。これでどう?」

「オウ。結構キレイーナッタゼ。アリガトヨ」

「 ついに見つけたぞ!見ろーこれが私自廻の別荘だ!ーー」

チャチャゼロちゃんの埃がはらい終わったと同時にエヴァちゃんが別荘を見つけた。

だけど私の目の前に置いてあるのはガラスビンの中には塔がある、まるでボトルシップみたいな物。

うーん・・・どう見ても別荘には思えないな・・・

「マラクスさん知ってるの?」

「ほお・・・ダイオラマ魔法球ですか・・・
これは珍しいですね・・・」

「はい。内と外の時間が異なって進むとこ、とても希少な魔法具

で御座います。

現存する数が大変少なく、またその殆んどが粗悪品か欠陥品。ここまで良質なダイオラマ魔法球は中々お目にかかるません。

「へえ」

「イマイチよく分からないうけど、なんかスゴイ物だということ」は分か
つた。

「ほらほら、そんな所に突っ立つていなで」ひみこに来い。
はやく別荘にいくぞ」

「あ、はい・・・」

エヴァちゃんに呼ばれてボトルシップの近くによる。すると、私の足元が光つたと思つたら、私の視界はテレビのスイッチを切つた画面みたいにプツンと途切れだ。

side out

突如発生した光に飲まれた雪はゆっくりと目を開けた。雪は眼前に広がる光景に目を奪われた。

彼女の視界に映つたものは
・
・
・
・
・

「わあ・・すゞい・・・・・」

周り全てを一望できる高い塔。
辺り一面に広がる綺麗な海。
暖かく心地よく吹きつける風。

雪は田の前に広がる圧巻の光景にただただ驚いていた。

「…………だスゴイだろ!?

これが私自慢の別荘だ。少し物足りなさはあるがな・・・

その隣でエヴァは自信満々な表情をみせる。

どうやら雪が不満に思うなど考えていないのだろう。

まあ、雪のあの表情を見れば誰だってそう想うだろう。

「うんー…とつてもスゴイよ!—!

こんなにキレイな景色始めて見た!—!」

案の定雪はエヴァの手を取つてとても喜んだ。

それを見たエヴァもとても嬉しそうな表情をしている。

「気に入つてもらえて何よりだ。

だがここに呼んだのは景色を見てもらつ訳ではない。
ここに呼んだのは雪の魔法を見るためだ

「

「私の . . . 魔法」

雪はエヴァの言つた言葉に理解が追いつかず、頭に^{レフ}を浮かべて首を傾げる。

「そうだ。雪はあの全能神のオーディーンと全ての悪魔達を統べるサタンから力を貰つてゐるのだ。

これは非常に興味深い。雪も気になるだらう。

自分がどんな魔法を使えるのか

「た、たしかに . . .

雪はエヴァの補足を聞いてようやく意味が分かつたのか、首をノクノクと揺りしながら頷く。

「そうと分かれば早速やるわ。
マラクス。お前も手伝ってくれ

「かしこまりました

雪のアシモも聞いた事で、エヴァはやる気満々のオーラを出し、側にいたマラクスを呼ぶ。

「早速だがマラクス。お前は雪の使える魔法について何か知っているか？」

「全てではありますんが多少の事は存じております。なんでも雪お嬢様は攻撃魔法が一切使えないとの事」

「なに？ 攻撃魔法が一切使えないだと？」

エヴァはマラクスの言葉に眉をよせた。

それはそうだろう。攻撃魔法が得意でないのならまだ分かるが一切使えないなど聞いた事がない。

「はい。争い」とをお嫌う雪お嬢様の為に我が王とオーディーン様が攻撃魔法の才を一切上げず、何十年訓練しても魔法の射手すら使えないと。

その代わり雪お嬢様の防御魔法と結界魔法の才はこの世界では最強。結界魔法に至つては我が王とオーディーン様の使う魔法が雪お嬢様に伝授されております

「結界…ふふ、そうか、“防御魔法”ではなく“結界魔法”か…

あの2人も存外に工グい事をするじゃないか

エヴァはこの言葉遊びに気付いたのか、不敵な笑みを浮かべる。どうやら“防御”と“結界”的違いをエヴァは即座に見抜いたらし
い。

さすが【闇の福音】の名は伊達じゃない。という事だらし

「ですがこの事は雪お嬢様には」内密に。

雪お嬢様には出来るだけ魔法の影の部分には触れさせたくないのです

す

「ああ、分かっている。私も悪戯に雪にそんな道を歩ませるつもりはない」

“魔法”とはただの“力”であり、そこに善悪の感情はない。

その事をよく知り、その道を歩いてきたエヴァだからこそ、雪にはその道を歩ませてください。

エヴァはマラクスの言葉に約束・・・いや、誓いをたてた。

「感謝いたします。それではコレを・・・

雪お嬢様の使う魔法媒体で御座います」

その言葉に安心して、マラクスはエヴァに2つの指輪を手渡す。

1つは上品でいて決して派手でもなく、質素でもない、内側に18の文字を彫り込まれて金の指輪と、

もう1つは、燃えるような輝きを放ち、今も燃え盛っているような深紅の紅玉と、その紅玉をあしらった、まるで吸い込まれそうな輝きを放つ銀の指輪だった。

「ひー？・・・マラクス・・・」の2つの指輪は・・・

エヴァはこの2つの指輪に内包されている力を感じ取り驚きの表情をみせる。

「はい。エヴァンジェリン様のお察しの通り。

1つはオーディーン様の神宝【グングニル】と全く同じ材質から造られ、内側に18の原初のルーン文字を彫り込んだ指輪と、もう1つは魔界にて決して消える事のない地獄ゲヘナの業火によつて打ち鍛えられた魔鉱石と、その地獄の業火を紅玉の形に押し込めた指輪で御座います」

「……こんなものが人間界の存在していいのか？」

これを他の奴等が見れば血で血を洗う惨劇が起きた

「仰る通りで……

私個人の見解では、この指輪1つで少なくとも国4つが転覆するかと……」

「…………」

エヴァはその余りにも規格外の至宝を見て、驚きを通り越してもはや呆れた表情しかできなかつた。

「エヴァンジェリン様の懸念は分かりますが、この指輪にはとても強力な認識阻害と隠蔽魔法が施されており、殆んどの者はこの指輪をただの指輪か、少し上等な魔法媒体としか認識しません」

「や、そつか . . . それなら安心だな」

「ね~、2人ともなんの話ししてるので~?」

2人がずっと話し込んでいたのに痺れを切らしたのか、雪がトテトテとエヴァ達の所に歩み寄る。

「雪 . . 。いや、なんでもない気にするな。
それよりもほら。魔法を使う為に必要な魔法媒体だ。
大事にするんだぞ」

「わあ . . すゞくキレイ . . 。大事にするね」

エヴァは2つの指輪を雪の中指にはめると、雪は指輪を光に当てて
そのキレイさに声を漏らした。

「よし、準備が出来た所で早速やつてみるぞ。
つとその前に、雪。魔法の使い方は分かるか?」

「うん、使い方は頭の中に入ってるつとおじいちゃんが言つていた
かり多分 . . .」

「よし、それならまづはやつてみるか。

頭の中で思い浮かんだのを適当に使つてみるんだ

「はい」

雪は一度田を開じて、エヴァに言われた通り頭の中で魔法を思い浮かべる。

「むむむ・・・・・・・【聖結界・城】・・・・・

可愛らしい声で唸つていた雪だが、しばらくしてると白い光がエヴァ達の周りを覆つた。

その光は何人たりとも決して穢す事なく、また、侵す事の出来ない絶対不可侵の聖なる光だった。

「なんという結界だ・・・。全盛期の私の力を以つてしても傷付けられるか分からん・・・。

これがあの全能神、オーディーンの魔法か・・・。

しかもそれ程の結界をなんの詠唱もなく展開するとは・・・

エヴァは雪の展開した結界を見てただただ啞然としていた。

ちなみにエヴァはまだ知らないが、この【聖結界・城】はこの世界の魔法でいう魔法の射手サギタ・マギカと同程度の初步魔法であり、これより上位の結界魔法はまだまだある。

「えと・・・成功で・・いいのかな?」

「はい。見事成功で御座います。雪お嬢様」

「ケケ。スゲージャネーク。ココマデスゲー結界魔法は初メテ見タ
ゼ」

「」の結界を破壊するために必要な火力兵器を検索
ヒット。ドイツ陸軍採用。クルツップ社製の 80cm 列車砲搭載の 7
1t ベトン弾による 26 発一点同時発射で破壊可能」

他のメンバーも思い思いの言葉で雪に賞賛の声を送る。
だが茶々丸の言葉だけは諸手を挙げて喜ぶ事が出来ないのは私だけ
じゃないと思つ . . .

「 だが、これでは私の呪いを解く事は出来ないな . . .
まあマラクスの説明を聞いた時から薄々と分かつてはいたがな . . .
」

雪の結界魔法の衝撃から立ち直ったエヴァは自分にかけられた呪い
が解けないことを知ると、落胆の表情を見せた。

「呪い . . . ああ、登校地獄ですか？」
その程度の呪いすぐに解呪できますよ？」

だがそれを聞いたマラクスからは衝撃の言葉がまるで日常会話のよ
うにさらっと出てきた。

「なに！？それは本当か！？」

この陥々しい呪いが本当に解けるのか！？」

「はい。我が王の使う結界魔法の中に“精靈を喰らう”といつ結界魔法が御座います。

登校地獄の他にエヴァンジエリン様の力を封じている術式がありま
すが、呪いが精靈によって効力が発揮しているのなら、その結界を
使えばすぐに呪いは解呪されます」

エヴァはマラクスに怒濤の勢いで詰め寄るが、マラクスは全く動じ
ずには解呪の概要を伝える。

「そうと分かればすぐにやるぞ！」

雪！頭の中に“精靈を喰らう”結界をイメージして結界魔法を使つ
てくれ！」

「う、うん、分かった。

うぬぬぬ・・・【魔結界・靈喰】

エヴァに言われたまま、雪は頭の中でイメージを起こして結界魔法
を展開した。

展開した結界魔法はさつき展開した聖結界とは違ひ黒い光が辺りを
覆い、エヴァの体から鎖を巻きつけた2つの塊が飛び出し、声も發
せず黒い光に飲まれて消えた。

その瞬間エヴァから「ガチャツ」と、なにかが開錠された音が響い

た。

「フフフ・・フハハハハハハハハハハハハッ！
アツハツハツハハハハハハハハハハハハッッ！！！
これだ！これだ！！この体から止めどなく力が溢れる感覺だ！！
随分と久し振りの感覺だ！！これがエヴァンジエリン・A・K・マ
クダウェルだ！！！」

呪いが解けたエヴァは湯水のように溢れる力に歡喜して盛大に高笑
いをする。
その姿はとても無邪氣で、まるで誕生日を迎えた子供のようにはし
やぎ回る。

「雪！感謝するぞ！
お前のお陰でこの惡々しい呪いが解けた！
ありがとう雪！」

「うん、どういたしまして」

そしてエヴァは屈託のない笑顔で雪の胸に飛び込み、雪もエヴァを抱きしめながらクルクルと回った。

「ケケケ。“アリガトウ”ダッテヨ。アンナ素直ナ御主人ハ始メテ
見タゼ。

ソレニ、イツモアツタ刺々シサガナクナツテイヤガル。

アレジヤ年相応ノ子供ト変ワラネーゼ。
妹ヨ。御主人ニナニガアツタンダ?」

「そうですね・、雪さんがとても素晴らしいお人、としか言ひようがありません」

「ナルホド、マソウダロウナ。
アイツハ今マデ見テキタナカデ初メテノタイプダナ。
アソコマデ邪氣ガナイ真ツサラナ人間ハ初メテダゼ」

その2人の姿を見て茶々丸とチャチャゼロは思い思いの言葉を言う。
そのあとは別荘の中を散策したり、チャチャゼロがマラクスに殺し
合いを持ちかけたりと、慌ただしくも楽しい時間が過ぎた。

~~~~~一方その頃~~~~~

「学園長!闇の福音の呪いが解けたといつのは本当なんですか!?」

学園長室では数十名の教員と生徒が集まつており、その中で黒人教諭が学園長に詰め寄つていた。

「まあまあ落ち着くのじやガンドルフィーー君。確かにエヴァにかけられていた登校地獄と学園結界は完全に解かれておる。  
ふおつふおつふお。まさかとは思つておつたが本当に解くとはの・・

「

「呑気に笑っている場合ですか！？」

「これは麻帆良学園の重大な危機ですよ！？」

それにこの前感じた魔力の持ち主にはなんの処分を下さず、闇の福音の家に住まわせているそうじゃないですか！？」

闇の福音の呪いを解いたのもその侵入者ではないのですか！？」

黒人教諭・ガンドルフィーは学園長の呑気な態度により一層怒りを露わにして怒声を飛ばす。

「じゃが侵入者は儂とタカミチ君が直に会つて話しをして悪い者ではないと判断したし、エヴァの呪いも3年経つたらサンザンドマスターが解くと言つておったから今更解呪しても問題ないじゃろう」

「危険です！解呪を約束した年数なんて関係ありません！！解呪された闇の福音が野放しにされているのが問題なのです！！

生徒達に危険が及んだらどうするのですか！？」

それに、「悪い者ではない」と言つても闇の福音の家に住んでいる以上信用できません！

即刻部隊を編成させて討伐を

「ガンドルフィー君。それ以上言つとどうなつても知らんぞ？」

ガンドルフィーが侵入者の・雪の討伐を口走った瞬間、近右衛門から膨大な魔力が放出され、ガンドルフィーに叩きつけられた。

「あの子は全ての不幸を背負わせて壮絶な人生を歩んできたのじや。」

そしてようやくその呪われた人生から開放されて人並みの幸せを享受しようとしているのじや。」

それを阻害する事は断じて許さん」

「 」

Gandalf もその気迫に押されて何もいう事ができず口を閉じる。

だがその日はまだ納得していなかつた。

「 . . 分かりました」

Gandalf はこれ以上の論議は無意味と悟ると、それだけ言って学園長室から出て行つた。

それに続いて他の教員と生徒達も学園長室から退室した。

「ふう . . 全く頭の硬い . . . . .

少しは物事を柔らかく捉える事は出来んのかの？」

1人となつた学園室で近右衛門は1人愚痴を言つ。

麻帆良学園にて不穏な空気が漂い、争いの火種が少し、また少しう  
芽吹きつつあった。

登校地獄ですか？解説できますよ。（後書き）

チャチャゼロのセリフが書きついなくて書きついなくて . . .

そつだ。マラクスが帰るか帰らないについてのアンケートはまだま  
だ応募しております。

詳しくは「エヴァちゃんはエヴァっせんだけよー」の後書きを参照し  
てください。

いまのところ一番の“帰る”が優勢です。  
他の皆さんもドバッと応募してください。  
もちろん普通の感想も大歓迎です。  
それでは（^-^）／

## マラクスの一冊（訳書）

さてと、今回まではマラクスが主な話しだす。  
これでアンケートの方も多少動きがあるんじゃないでしょうか?  
10月中に投稿できて安心しました。

## マラクスの一日

マラクス side

どうも皆様。段々と肌寒くなつていく季節、いかがお過ぎでしょ  
うか？

今回は僭越ながら、この私マラクスがお話しを務めさせて頂きます。  
不肖の身では御座いますが、何卒宜しくお願ひ致します。

おっと、長話が過ぎましたね。

それでは早速いきましょう。御覧あれ。

7:00~

「ふむ・・これで完成です」

気持ちの良い朝日が差し込む時間。  
私は朝食の準備を終わらせた。

今回作った料理はお味噌汁とほうれん草のおひたしで御座います。  
以前に茶々丸様の和食を見て雪お嬢様が大変お喜びになりましたの  
では非、私も作って雪お嬢様に喜んでもらおうと思つたのです。  
そして茶々丸様に師事し、今ではそこそここの和食なら作る事が出来  
ます。  
ですが、これではまだ程遠い・・・  
精進あるのみです。

「もうこんな時間ですか・・・  
お一人を起こしに　いや、あと5分は待ちましょ  
う」

私はお二人を起こそうとしてうとして止めた。

最初はお二人が起床してすぐに向かったのですが、エヴァンジェリン様は寝起きの雪お嬢様を愛するのが好きらしく、色々トイヤミニを言われてしまいました。

ですから約5分はエヴァンジェリン様に至福のお時間を提供しなければ……

「つと……そう考えてる内に5分経ちましたね。

起こしに参りましょう」

私は階段を上がり、お二人の部屋に向かったのですが……

「ああ……何という光景でしょう……

あの2人の姿を毎日見れる私は幸せ者です……」

二階に上がれば茶々丸様がお二人の姿を見てトリップしておりました……

……この時の茶々丸様はあまりお近づきになりたくないですね……

「ケケ、妹ヨ。立派一変態ヤツテルジャネー力」

チャチャゼロ様……変態に立派とは如何なものでしょうか……

茶々丸様は何時の間にか鼻血を流しておりますし . . .  
．．．口ボツトなのに鼻血を流すとはこれ如何に . . .

「茶々丸様．．．鼻血が出ております．．．」

「あ、マラクスさん。おふあよふじぎわこまふ。  
おはよいじぎわこまます

それと、ありがとうございます．．．（ふきふき）

茶々丸様は挨拶もそこそこにお一人の方に視線を移す。  
わたくし  
私も茶々丸様の視線を辿ると．．．

「おお．．．雪は本当に甘えん坊だな．．．  
ここか？」こが気持ちいいのか？」

「ああ、そこお．．．気持ちいいよあ．．．」

これはまた何と言つべきか．．．文字だけ見ると少し危ないですね．．．  
ですが、決してお一人は行為に及んでいる訳ではありませんよ。  
ただエヴァンジエリン様が雪お嬢様の頭や喉を撫でているだけです。

「あ．．．ああ．．．も、もう限界です！（ブハッ）

「これはこれは．．．」

茶々丸様が鼻血を噴いて倒れました。.  
ここに放置しておるのはいけませんね。  
すぐに一階に運びましょ。

「コン中デ一番ノ良識人ハテメーダナ。マ、頑張レヤ」

「・・ありがとうござります」

チャチャゼロ様の言葉に少し悲しくなりましたが、私は茶々丸様を一階に運び、再び一階に上がつてお二人を呼びにいきました。  
エヴァンジエリン様・・無言で睨むのはおやめ下さいませ。  
15分も私は待つたのですよ・・・

そして雪お嬢様、相変わらずの素晴らしい笑顔でござります。  
その笑顔だけで、このマラクスは今日も一日頑張ってゆけます。

11：00～

今日も楽しい朝食の時間は終わりました。

雪お嬢様はほうれん草のおひたしを食べて美味しいと喜んでおられましたが、エヴァンジエリン様には味噌汁の味が少し薄いと指摘を受けてしました・・・  
やはり和食は難しいですね・・それに奥が深い・・・  
これはまだまだ学ばなければいけない事が沢山ありますね・・・

さて、反省会はここまでにしておいて、いつもでしたらこの時間は雪お嬢様のお勉強の時間なのですが、今日は日曜日。

11時から精肉店のタイムセールが始まります。

今日の田舎商品は「国内産 鳥の胸肉100g 27円」です。

これはまた・・破格のお値段でござります。

何より安心の国内産。これは是非とも購入せねば！

「それでは雪お嬢様。  
私は買い物に行ってまいります」  
わたくし

「二〇一五年一二月二日」

雪お嬢様はエヴァンジエリン様とゲームをしてくるらしいへ、手をヒラヒラさせて私を送り出す。

おまけに草木に家の近隣を

朝からお酒とは、あまり感心できませんね。

「くそー！何故だ！？何故私の攻撃が当たらない！？」

「当たらなければどうぞ」と二つ事はないんだよHUGAちゃん。

二十一

「お嬢様が勝利したみたいですね。」

流石でござります雪お嬢様。

・ 私マラクスは感動しております ・・

「よし．．．対戦ゲームはやめにしよう．．．  
次は協力プレイのゲームだ！！！」

「怪物狩獵3rd? 面白そうだね!」

お一人は別のゲームでまた楽しく遊んでおりました。

仲が良いのは真に良い事で”ぞ”います。

私はお一人の楽しい声を背にして商店街へと向かいました。

「よし、無事にセール品を獲得しました！」

やはりお賣り物は戦場ですね

ですが、雪お嬢様にお仕えする身で敗北は許されません。

既にお客さんが沢山並んでいましたが何とかセル品を買ひ事はできました。

「昨日の八百屋のタイムセールで人参とジャガイモを買つたので カレーでも作りますか ・・・」

今晚の献立は決まつてますので明日ですね。  
洋食は私の専門分野ですから腕が鳴ります。

「 やあ、マラクス君。」

「こんな所で会うなんて奇遇だね」

そんな事を考えていると、雪お嬢様の担任になる高畠様にお会いしました。

「これはこれは高畠様。お久し振りで御座います。  
高畠様もお買い物の途中でしたか？」

「いや、僕は学園の見回りを。

一応、広域指導員としての仕事もあるからね」

広域指導員・・・確か学園の揉め事を鎮めるお仕事。

休日返上で働くとは高畠様は随分と仕事熱心な方で御座います。

「 そうでしたか、高畠様も大変ですね」

「 なに、それほど苦でもないよ。

それよりも雪君はどうだい？

上手くやっているかな？」

「はい。雪お嬢様はエヴァンジエリン様と毎日樂しく過(ハ)りますし、お勉強の方も滞りなく。

この前に中学1年生の内容を終えたので、あと一週間もあれば御学友の方たちに追いつけます」

「それは凄いね。ですが博識伯と言つたところかな？」

「（イ）「冗談を。・・雪お嬢様の気持ちがあつての事で（イ）や（コ）ます。私はほんの少しだけお手伝（イ）をして（コ）るだけです。」

本当に雪お嬢様の「学ぼう」という意思是素晴らしいものです。まるで水を吸い込むスポンジのよつじょんじょんと覚えていきまや。

「それは謙遜が過ぎるつてものだよ。

とにかく、話しが変わらんだけど・・・

瞬間、高畑様の目が鋭く変わりました。

雪お嬢様達に関係ある事なのでしょうか。

「一週間ほど前にエヴァの封印を解いたのは本当なのかい？」

「登校地獄とその他ですか？」

はい、エヴァンジエリン様に掛けられてた呪いは解呪しました

「やつぱりか・・・

雪君がこの学園に侵入した件もある。

その事で他の魔法先生や魔法生徒が不信感を募らせているんだ。学園長が抑えてはいるけど、それを振り切る人たちが出てくるかもしれない。

くれぐれも注意しておいてほしい

成る程……悪の魔法使いと世間で言われているエヴァンジエリン様の封印が解けるのは面白くない、と言った訳ですか……。古今東西、度を越した価値観は一つの例外もなく害になります。どうやら学園の魔法使い達は些か正義感が強すぎるみたいですね。

「雪君は素直で優しくてとてもいい子だし、エヴァも根はとても優しい。

それを曇つた正義の眼鏡をかけている人達が“悪”と決めつけるのが僕は我慢ならない……。」「

高畠様は心底悔しそうな表情をし、拳を強く握り締める。  
そうですね……私も雪お嬢様やエヴァンジエリン様が悪く思われる  
のは極めて遺憾です。

あの一人が“悪”だとしたら、この世に善人など存在しません。

「高畠様がそのように思つてくださるとは……  
その優しさに感謝いたします」

「違うよ。僕はそんな出来た人間じゃない。

皆んなは僕を英雄って褒め称えるけど、マラクス君は英雄はどうやら

つて英雄になるのか知つてるかい?」

「…」これはまた随分と重い質問を…

善も悪も両方知らなければ答えられない問い合わせですね。

「…大量殺戮を世界の過半数に認められれば、でしようか…」

「そう。沢山の人を殺し、それを認められれば人は英雄になれるんだよ。

そして僕も沢山の人を殺した…

その中には雪君のような純粋無垢に笑う子供達も含まれている…だから僕は…もつ一度とあんな事が起こらないうに雪君を守りたい。

例えそれで僕が“悪”にならうともね

これを他の魔法先生がきけば卒倒ものですね。

ですが高畠様は世の中の物事を偏る事なく非常によく捉えております。

このような方を“良識を持つ人”というのでしょうか。

この方が雪お嬢様の担任である事は真に喜ばしいばかりです。

「正義つて…難しいね…」

「そうですね…博識伯の異名をとつてゐるこの私ですら善と悪の明確な線引きは出来ません。

何が善で、何が悪なのか、非常に難しい問い合わせでござります

わたくし

「そりだね・・す”く難しい・・・  
つと、随分と長く話し込んでしまったね。

後半は僕の愚痴になってしまって申し訳ない

「いえ、高畠様が素晴らしい方だと改めて認識しました。  
貴方様を他において雪お嬢様の担任になる方はいません

「はは、そうかい。それは嬉しいね。  
それじゃあ僕は仕事に戻るとするよ。  
少なくともこの仕事は“善”だからね」

言いたい事を言って気分が晴れたのか、高畠様の表情は幾分穏やかなものになつて、お仕事に戻られました。

「高畠様も色々と大変みたいですね。私も雪お嬢様の身に危険が及  
ばないよう注意しなければ・・・」

雪お嬢様は顎廻目無しに見ても大変素晴らしいお方です。

あんなに真っさらな人は今まで見た事がありません。

悪魔の私が言つのも可笑しな話しだすが、雪お嬢様はまるで天使の  
ようなお方です。

ですが、雪お嬢様は人を疑う事を知りません。

それを優しさと言つ人もいらっしゃいますが、その優しさや純粹さ

利用する輩は必ず現れます。

私が居なくなつたとしても、エヴァンジェリン様が雪お嬢様を守つ  
てくれるので大丈夫ですが、少なくとも今は、私が雪お嬢様をお守

りせねばなりません。

「少なくとも後一週間。雪お嬢様に害を成す輩は私が全身全靈を以つて排除します」

私も高畠様と同じ決意を胸に刻み、雪お嬢様達の待つ家へ歩を進めました。

19：00～

家に帰った私は、明日のために早速カレーの仕込みを開始しました。カレーは出来たてよりも、一晩おいた方が美味しくなります。出来たてのカレーは、とろみが少なくスープカレーに近い状態が多い。皆様もそういう経験は少なからずありませんでしたか？

「オー、美味ソウナ匂イジャネーカ。作ッテンノハ、カレーカ？」

私がカレーの仕込みをしていると、チャチャゼロ様が現れて私の肩に乗ってきました。

チャチャゼロ様とはお酒を一緒に飲む事もある程仲良くなっています。

たまに殺し合いを持ちかけられたりする事もありますが・・・

りせねばなりません。

「チャチャゼロ様、左様で御座います。

明日のために今から仕込んでおかないといけませんからね。雪お嬢様とエヴァンジェリン様はご入浴ですか？」

「オウ、相変ワラズ仲ガ良イ一人ダゼ。

ツーカ仲良スギルンダヨ。百合ダ、百合ノ花ガ咲イテヤガル。モウイツソノ事、籍<sup>ヌメ</sup>テモ入レチマハ」

「雪さんとマスターがお風呂 . . .

いけません2人とも . . そんなんくんずほぐれつで . . .

ああ . . ゴートピアはここにありました . . . (ブハッ)

「デ、妹ハ妄想ニ耽ツテ鼻血出シテイヤガルシヨ . . . ドウシテ「ウナッタ?」

チャチャゼロ様の背中からは哀愁感漂うオーラが出てきました。  
私も同感で御座います。

主に茶々丸様ですが、茶々丸様の愛は少々オカシイといいますか少し間違った方向に進んでおります。

普段はちゃんとしたお方なのですが . . . 残念です . . .

「 . . . . . はあ  
「 . . . . . ハア」

わたくし  
私とチャチャゼロ様のため息が重なった瞬間でした . . .

「ふう～～・いいお湯だつたねエヴァちゃん

「だな～～～・・・」

とやこへ、お風呂から上がつた雪お嬢様とエヴァンジェリン様が戻つてまじりました。

ふむ、今田の寝間着は浴衣みたいですね。  
選んだのは茶々丸様ですか・・・風流で御座います。

「あれ? 茶々丸さん、どうしてこんな所で寝てるの? 風邪引いやうよ?」

雪お嬢様が茶々丸様に気付いたみたいですね。

茶々丸様は・・・ダメですね。

今日はもうひ田を覚まさないでしょ?・・・

「茶々丸様はお疲れになつたので、本日はもうお休みになられました。  
後で私がベッドに運びますので雪お嬢様はお風呂になさりや

「ソレニ妹ハ風邪ナンカ引キヤシネー!」  
安心シトキナ雪

「ア～～・でも～～～・・・そりだーちよつと待つててね」

雪お嬢様は暫らくへ考へ込んでいた、いきなり一階に上がってしまった。

そして少し待つてみると、雪お嬢様は一枚の毛布を持って戻つてきました。

「せめて毛布だけは掛けさせてあげないと。

おやすみなさい茶々丸さん。また明日ね」

雪お嬢様は茶々丸様に優しく毛布をかけてポンポンとたたき、温かい微笑みを向けました。

「 雪～、髪を梳かすから早く～い

「は～い、今いくよエヴァちゃん

そしてエヴァンジョン様に呼ばれて、雪お嬢様は一階へと向かつてこきました。

「・・・ヤツパ優シイナ、雪ハ・・・

「全く・・その通りで御座います・・・

本当に雪お嬢様はお優しい・・  
ここまで素晴らしい方にお仕えする事ができて、私は幸せ者で御座わたくし

います . .

「マラクス。イイ酒ガアルンダ、今夜チヨツト付キ合ヒヤ

「ええ、是非。ご一緒させていただきます」

魔神といつ最高位種である私には睡眠という行動は必要ありません。  
お優しい雪お嬢様が知れば絶対にお怒りになりますが、今夜だけは  
ご容赦お願いします。

「それではグラスを出しますね

「オウ、頼ムゼ」

少しだけ . . ほんの少しだけ、私もこの幸せの余韻に浸つていいたい  
のです . .

00 . . 00

「ん?この気配は . .

チヤチヤゼ口様とご一緒に酒を飲んでいる途中、外から妙な気配  
を感じ取りました。

「マラクス・オメーモ氣付イタカ?」

どうやらチャチャゼロ様も氣付いたみたいですね。  
チャチャゼロ様から感じる雰囲気がいつもと違います。

「ええ、チャチャゼロ様。

どうやら敵が侵入してきたみたいです。  
しかも相手は人外ですね」

さつきから感じる、人とは違う禍々しい氣。

それも、少し違う気が集まっています。

敵は別々の種族が集まっている混成部隊のようですね。  
数は……ダメです、ここからでは分かりません。

「敵ノ目的ハ俺タチジャナサソーダガ、少シズソコッチ一近付イテ  
イヤガル。

御主人ハ学園結界ノ効果ヲモウ受ケテネーカラ侵入者ノ情報ハコネ  
ーシ、今ハ雪ト一緒ニ仲良ク寝テイル。  
妹ハ、ゴ覧ノ通リダウン中。テ、イウコトハダ……」

「…………私達が出るということですね……」

全く……雪お嬢様達の睡眠を妨害するとは何と愚かな……

ここに来る可能性がある以上、敵は殲滅しなければいけません。

「チャチャゼロ様はこの家の守備をお願いします。

別働隊がいないとも限りませんからね。

私は外にいる不届きな輩を駆逐してまいります」

私はポケットに入っている黒い革手袋を両手にはめる。

懐かしい感覚です。戦闘をするなんて何時振りでしょうか・・・

「オメー一人デ大丈夫力?  
ナンナラ俺ガ代ワツテモイインダゼ?」

「お心遣いありがとうございます。

ですがご心配には及びません。

確かに私は戦闘に不向きです。

同じ魔神の中でも最下級の弱さでしょう。

でも侮つてもらっては困ります。

魔神は最高位種の一つです。例え最下級の私わたしでも街一つは滅ぼす事ができます。

この程度の相手・・造作もありません」

それに私には数百年ほど前に仕えてた方から賜つた、この革手袋があります。

これを使えば中級魔神とも互角に渡り合えます。

「ソウカ・ナラオ前二任セルゼ。

絶対二無事デ・ナンテ言葉ハイラネーナ。

早朝ノニセテ酒食ノソ

「かしこまりました」

茶々丸様ほどではありませんが、私も2人が寝ている姿を見ると、  
とても心が安らぎます。

あの幸せの一コマを壊すことは私が断じてさせません。  
わたくし  
私はチャチャゼロ様に一礼して侵入者の所に向かいました。  
わたくし

¶

家を出て約十分。

侵入者はすぐに見つける事ができました。

に申し分ありません。

それと翼が生えている . . . 確か鳥族といつた種族。鬼は三十、鳥族は十体といったところですか。

何故そんなに詳しく知っているのかと言つて、現在進行形で私と侵入者は対峙しているからです。

「なんだいアンチャン？なにそんな所で突つ立つていやがるんだ？」

おそらく大将格であるうと思われる鬼は私の事を観察するように見  
る。

今は魔力も氣も抑えているので、わたし私を対した脅威と見ていないので  
しう。

「ここから先には家があり、そここの住人はお休みになられてあります。  
あの方達を起こしたくないので、申し訳ありませんが即刻引き返して下さい」

「そりだつたのか、それは済まんかつたな。  
だが、俺達は喚ばれた身なんですね。

悪いが召喚士に逆らう事はできねえんだ。  
それと目撃者は消せつて言われている。

済まねえがアンチャンにも消えてもらつぜ」

まあ、それはそうですよね . . .

わたし私も喚ばれる側なのでそれは分かります。

大将格がそう言うと同時に、他の鬼が左右から攻め込む。  
ですが . . . . .

「 . . . 無駄ですよ」

攻め込んできた鬼たちは、見えないナーナーかによつて首を切断され、煙となつて還つていつた。

「アンチャン……一体なにしたんだ……？」

大将格の鬼は即座に私から距離をおき私を射殺さんとばかりに睨みつける。

惜しいですね。あと一歩で仕留められたのですが……

「戦いで己の手の内を見せるような愚行はいたしません。  
知りたいのなら、自身の目で看破なさい」

「ははっ、それはそうだな。不躾なこと言って悪かった。  
アンチャンが何やつたか、俺自身の目で見破らせてもらひや。野郎どもー!』を使え! アンチャンを近付けさせるなよー!』

『おうーーー』

そして、敵から放たれる十数本の矢。  
良い判断ではございますが……

「私には効きません」

またも見えないナーナーかによつて、飛来してきた矢は全て切り落とさ

れる。

「 後ろおおーー！」

「 貰つたぜえええーー！」

その時に一体の鳥族が私の背後に回つて切りかかるつてしまひました。

成る程、『』での攻撃はフュイクで「」が本命といつ訳ですか・・・

悪くはありませんね。

「 . . ですが相手が悪すぎます」

「 な . . ?」

「 え . . ?」

おそらく切られた事すら分かつていないのでしょう。

一体の鳥族は胴体を真つ二つに切られ、煙となつて還つていった。

その時、月の光によつて一本の線が煌めいていた。

「 成る程 . . 糸か。アンチャンの使つてゐる武器は糸なんだな

「 おや、バレてしましましたか . . 」

そう。<sup>わたくし</sup>私が使つていたのは糸。  
それもただの糸ではありません。

数百年ほど前に仕えてた【蜘蛛王】バアル様から賜つた糸です。  
一本で恐ろしい程の強度を持ち、伸縮自在で持ち主の意のままに動く糸です。

「つたくメンドくせー 得物だな。

目で見る事は殆んどできねーし、氣も感じられねえ。

しかも攻撃するのも速いときた。

仕方ねえな。ここは玉砕覚悟で突っ込むしかねえか」

そつと、相手は<sup>わたくし</sup>私の周りを取り囲むように移動する。

「精々、手加減をしてくれよアンチャン

「それは了承しかねます」

「ケチなアンチャンやなあ。

まあいいわ、それなら・・・行くで?」

まるでダムが決壊したかのような勢いで相手は<sup>わたし</sup>に向かつて殺到する。

これを・・・この時を待つておりました。

「掛かりましたね。これで終わりです！」

押し寄せる鬼達の群れを、月光に煌めく銀閃が鎌鼬のようだ木々を切り、まるで死神の鎌みたいに鬼達の首を切り落とした。

「なつ・・・なんだと！？」

他の鬼達は還りましたが、大将格の鬼だけは首への一撃を免れたらしく、まだ残っていました。  
ですが傷が深いですね。もう長くないでしょう。

「貴方達と対峙した時から既に糸を張り巡らさせていただきました。このような展開になつた時に一網打尽にするために」

「・・・全部アンチャンの手の平つて事かよ。

酒呑童子様の配下である」の虎熊童子が情けねえぜ・・・」

「まさか鬼達を統べる酒呑童子の側近であり四天王の虎熊童子様だったとは・・・

それならば私も名乗らねばなりませんね。

私の名はマラクス。博識伯のマラクスでござります。

お初にお目にかかります。虎熊童子様」「

「・・・・・おいおい・・アンチャンは魔神だつたのかよ・・・

伝説クラスの悪魔じやねえか・・・

まさかこんな所で伝説に会えるなんてな、俺の方が光榮だぜ」

「そんなご大層な者ではありませんよ。  
私は魔神の中では一番弱いですから」

「へつ . . それで一番弱いかよ . . .  
伝説の魔神は伝説に違わぬ強さだな . . .  
こいつあ皆さんに自慢できるぜ。  
あばよ、魔神のアンチャン」

そう言つて虎熊童子様も煙となり還つていきました。  
これで全て終わりですね。

「ん? . . .」に近付いてくる気配がありますね . . .

近付いてくる数は二つ。  
学園側の警備員といったところでしょうか。  
些か仕事が遅いように思います。

「それにこの方達もまた . . .  
一人はさつき戦つた鳥族のハーフでしょうか?  
もう一人は . . . これは懐かしい。  
同郷の方ですね。こちらもハーフですけど」

学園側は色々と突っ込み所のある人員登用をなさっているんですね。  
ここは逃げた方がいいでしょう。

見つかれば厄介な事になりかねません。

「それでは警備員の方、私は失礼致します。  
良い夢を・・・」

そして私は、始めからここに居なかつたかのように姿を消した。

後日談ですが、私が作ったカレーは大変ご好評いただきました。  
今度は何を作りましょうか・・・

## マラクスの一田（後書き）

アンケート募集中！！

期間は10月イッパイです！！

詳しく述べ前々話の「エヴァちゃんはエヴァなんだよー」の後書きを見て下さい。

はたしてマラクスは帰るのか、それとも帰らないのか、もう少し期待

（ ^\_\_^ ） -

## 転入。そして . . . (前書き)

ようやく完成しました . . .  
雪がついに2—Aに転入します。  
この話でアンケートの結果が分かります。  
まあ、感想欄を見ればすぐに分かるんですけどね。  
アンケートに投票して下さった方々。本当にありがとうございました  
た( )、( )、( )、( )、  
それではどうぞ。

転入。そして・・・

雪 side

ついに・ついにこの日がやってきた・  
私がこの世界に転生してから一ヶ月・夏休みが終わりました。  
今日から・今日から学校が始まります!!

「学校」 学校「」

私が夢にまでみた・行きたくて行きたくてもうがなかつた学校・

嬉しさで思わず変な鼻歌を歌っちゃう。

「雪 少しは落ち着いたらどうだ?」

朝早くからそんなテンションだと疲れるぞ

「だつてだつて、ずっと楽しみにしていたし、嬉しくて仕方ないんだもん!」

さつきから胸のワクワクが止まらない!

昨日もあまり眠れなかつたし、早く学校に行きたい!!

「全く仕方のないやつだな雪は・・・

登校時間まであと少しだからひまつと待つていろ

「でも・・・ううう・・でもおおお・・・」

あともう少しのは分かるんだけど、そのまつりしがスゴく長く感じ。

早く・・早く行きたいよおお・・・

「う・・そんな可愛いいうなり声をあげないでくれ・・・  
私の心が保たない・・・

そんなに待ち遠しいなら、今のうちに制服でも着てみたりどうだ?  
ほら、雪の制服だ」

最初の部分は小さくて聞き取れなかつたけど、エヴァちゃんは私に  
制服を渡す。

わあ・・マンガで見たよりも実際に見た方がカワイイ・・・

「うん、分かつた!

それじゃあ今から着てくれるね!」

私はエヴァちゃんから制服を受け取つて、早速着替えた。  
似合つかなあ・・ちょっと楽しみ

## エヴァ side

私が制服を受け取った雪はとても嬉しそうな表情をして着替えにいった。

朝からずっとそわそわして…よつほど学校が楽しみなようだな。さつきだって可愛いいうなり声をあげて…まるで、お預けをくらつた仔犬のような感じだった。

うむうむ…とても可愛かった。

もう少しで私の心が跡形もなく木つ端微塵になる所だった…危ない危ない…

「ああ…雪さん…雪さん…あんな事をされでは私は大量出血で死んでしまいます」

茶々丸は既にノックアウトか…

鼻からドクドクと血を垂れ流している。

雪がこの家に来てから茶々丸はどうもオカシイ。

何というか…変態度が増したような気がする。

それにロボットなのに血を流しているし、葉加瀬や超にでもメンテナンスを頼んでみるか…

「…さ…着替えたよ…」

む、どうやら着替えが終わつたみたいだな。  
どれだけ…雪の制服姿はどんな感じ

• • • • • • • • • • • • • • • •

振り返った瞬間、私は言葉を失った。

別に雪の制服姿が似合わない話じゃない、かと書いて素晴らしい似合つといつ訳でもない。

その姿は普通に何所にでもいる女子中学生だ。だが問題はそんな所じゃない。問題は雪の仕草だ。

恥ずかしさなのか、少し顔を赤らめ、スカートの裾をギュッと握りしめ、足を内に寄せてモジモジとしている。その姿がまた何とも言えない。・・・

いかんいかん。落ち着くのだ私。  
雪と一緒に過ごしてから一ヶ月が過ぎたのだぞ。  
こんな不意打ちの対処法は既に熟知している。

まずは深呼吸・。その次に今日の晩御飯を考えるのだ・。・。よしよし、だいぶ落ち着いてきたぞ。

「雪…一體どうしたといつのだ？」

私は努めて平静を装い雪に聞く。  
フツ・・流石は私だ。

「だ、だつて・・・」の制服・・ちょっとスカートが・・み、みじか

い . . .

最後は段々と窄すばんだ声になつて雪は言つ。  
そんなに短いか？確かに膝よりも上だが、普通のガキ共とそう変わらんだろう。

まあ、雪の普段の服装はワンピースだから仕方ないか . . .

「そんな事ないぞ。

今時的小娘どもなら普通の長さだ。

それに、雪の細くて白い、キレイな足が見えて良いじゃないか」

雪の体はとてもキレイだ。

一緒に風呂に入つたりもしてるから分かる。

体の線は細く、まるで淡雪を思わせるよつだ。

それがまた保護欲を搔き立てる要因なのがな。

私の言葉を聞いた雪は、さつきよりも一層モジモジしだして . . .

「 . . . . . えつちーーー」

グハツツー！！！

そんな . . そんな可愛らしい羞恥で染まつた目で私を . . そしてその言葉 . . . !

なんと愛らしい . . そして、何というか破壊力か！？  
イカン . . これはイカンぞおおお . . . !

「マ・・マラクス・・・水を・・水をくれ・・・！」

「かし」まりました

私はマラクスが注いだ水を一気に飲みほして何とか事なきを得た。  
危なかつた・・本当に危なかつた・・・  
まさか一発で沈められるとは・・・  
帰つてこれないと思つたぞ・・・

「録画・・・完了・・・

もう私に、悔いは・・ありません・・・

茶々丸は本当に満足した表情で逝つてしまつた。

私もあと少し対処が遅れていれば同なんじになつていたのか・・恐  
ろしい・・・

それと、あとで私にもその録画した映像を渡すんだぞ茶々丸・・・

「ケケケ、朝ツバラカラ騒ガシイナ。  
ツト、御主人。モウ時間ジヤネーノカ？」

ん? 時間だと?

まだもう少し時間が・・つて思い出した。

雪は転入生だからいつもより早く登校せねばならなかつたのだ。

「雪、もう時間だから行くぞ。

雪は転入生で、担当やら学年主任の話しが聞かなければいけないんだ

だ

「うと・・でもスカートが・・・

「大丈夫だ。他の皆さんと全然変わらん。  
ほら、さつとと行げば」

「わわ、待つてよエヴァちゃん。  
足がスースーしちゃうよ」

私は雪の手を引っ張つて家を出た。

ふふ・・一体どうしたというのだ・・・?

私までワクワクしているぞ。

15年間も縛り続けられたアノ牢獄のような学校が。  
これも、雪と一緒にいるのからなのかもしれないな  
いや、そうに違いない。

雪が側にいてくれれば私は何所にいても満足だ。

私はこの笑顔を雪に悟られないように学校へ向かつて走り出した。

雪 side

エヴァちゃんに引っ張られて、私は学校まで来ちゃった。  
ほんの少しだけど登校してきている人達もいる。

エヴァちゃんの言った通りでスカートが短い・・やつぱりこれが普

通のかなあ . . .

でも . . やつぱり少しだけ恥ずかしいよ . . . / / /

「 おい雪、職員室についたぞ。  
まずはタカミチにでも挨拶してこい」

少し考え込んだじゃつたかな?

いつの間にか職員室についたじゃつた。

うう . . スゴくドキドキしてきた . . .

「 じゃあ私は先に教室に行つてお。またな雪」

それだけ言つと、Hヴァちゃんは教室の方に行つちやつた  
じひじょつ . . 私一人だけになつちやつたよお . . .

「 . . ううん。弱氣思者はダメ!  
頑張れ! 柏木 雪! !」

私は自分の弱気を追い出して両手でガツッポーズする。  
うううん . . 何事も弱氣、ネガティブはダメなんだから。

「 ふう . . し、失礼します」

職員室に入る作法はマラクスさんに教えてもらつたからこれで大丈夫なはず。

私は一度深呼吸したあと、ドアをノックして職員室のドアを開けた。よし、頑張るんだぞ、私！

side out

「 し、失礼します」

雪は緊張の面持ち、といった感じです職員室に入室した。

雪が入ってきた瞬間に数人の教師・いわゆる魔法先生が目付きを鋭くしたが、生まれてこのかた悪意や敵意といったものを感じて事がない雪には分かる筈もなかつた。

「あ、あの・2-1-A担任の高畠先生はいらっしゃいますか？」

雪は少しの間 職員室を見渡したが 担任の高畠先生は見つからず近くにいた 眼鏡をかけた初老の男性教師に声をかけた。

「高畠先生かな？高畠先生はあと2～3分もしたら来る筈だよ」

雪が声をかけたのは学年主任の新田先生。

一部の生徒からは『鬼の新田』と恐れられているが、それも生徒を思つての事。

生徒の事を大切に思う先生では学園トップクラスの先生である。

「ん？ そういえば君は初めてみるね。

もしかして高畠先生が言つていた転入生かな？」

新田先生は、雪が転入生なのをすぐに言い当てた。  
それだけでこの人がどれだけ生徒を大切に思つているのか窺い知れる。

このマンモス校である麻帆良学園の生徒の顔を覚えているのは新田先生くらいだわ。

「は、はい。今日から2ーAに転入する柏木 雪です。  
よろしくお願いします」

雪は自分の名前を言つたあと、頭をガバッと下げる。  
どうやらまだ緊張しているようだ。

そして、雪の言葉を聞いて一部の・・特に黒人教師は目付きを一層厳しくした。

「やつぱりそうだったか。

おっと、私も自己紹介がまだだつたね。

私は新田 玄人。<sup>げんと</sup>2年の学年主任をやつてゐる。

柏木 雪くんだつたね？ これから宜しく

「まー。 よりじくお願ひします」

新田先生は優しい笑みを向けて雪に語りかける。

どうやらその笑みで雪の緊張はほぐれたみたいだ。  
雪の緊張を見抜き、なおかつ緊張をほぐすとは…

流石は大ベテラン教師 新田先生。

「 おや？ 雪くんじゃないか。  
ずいぶんと早かつたね」

と そこへ、高畠先生が出勤してきた。

「あ、高畠先生おはよひざこます」

「高畠先生が、転入生の雪くんは既に来てますぞ

雪は高畠先生に挨拶を言い、新田先生は少し窘めるような口調で言う。

「これは済みませんでした新田先生。

生徒よりも先生が遅いとは… 雪くんも済まなかつたね

「い、いえ、私が早く きすぎただけなんで！」

高畠先生は気にしないでください！」

高畠先生の謝罪に 雪は手をブンブンと振つて慌てる。  
どうやら雪は謝られる事もあまり慣れていないみたいだ。

「やう言つてくれると助かるよ。

わひと、それじゃあ新田先生、雪くん。

早速だけど色々と説明しようか

高畠先生は雪に説明するため 職員室を出るよつに促す。  
もつとも、早く説明したい訳ではなく、魔法先生達が雪に浴びせる  
視線に我慢できないためだ。

心なしか、高畠先生の表情は苛立つているように見える。

「それもやうですね。

では雪くん。行くとしようか」

「はい」

高畠先生に続いて新田先生、雪と、職員室を出て行つた。  
雪がドアを閉めるまで、魔法先生達は雪にたいする視線を止めるこ

とはなかつた . . .

~~~~~その後~~~~~

「まわか……ずっと重い病氣で学校に行くことができなかつたとは
雪くんはとても苦労したんだね……
う・・うおおおおおお……」

「あ、あのあ……新田先生？」

「決めた！決めたぞ雪くん！！
困つたことがあつたら私に相談するんだ！
勉強面でも学校生活面でもどんな事でも相談に乗つてあげよつ……」

「は、はい……ありがとうございます？」

学園の説明が終わつたあと、大量の涙を流して雪の手を握る新田先生がいたとかいないとか……

雪 side

学園の説明が終わつて、私はよつやく一人の教室を田の前にして
いる。
ドアを挟んでも皆んなの楽しそうな声が聞こえる。
この向こうに……このドアの向こうに私が夢見た光景がある……

「それじゃあ僕が先に入つて雪くんの事を軽く説明するから。
それが終わつたら合図するから入つてくるんだ」

そして高畠先生はドアを開ける 前にドアに挟んである黒板消しを取つて教室に入つていつた。
うう・・胸がスゴくバクバクするよお・・

「それじゃあ雪くん。入つてくれ

わ、呼ばれちゃつた・・
よ、よし・・行くぞ・・

「は、はい」

私は一度深呼吸して教室へと入つていつた。
頑張るんだ、私！

エヴァ side

私は雪が来るまで教室で待つていた。
ちなみに茶々丸は少し遅れてきた。
ふふ、私の封印が解けた事に数人の人間が驚いているな。
あれは桜咲 刹那と龍宮 真名か。

安心しる。雪がこの学園に通う限り、私は暴れたりせんよ。
学校に行けなくなれば雪が悲しむからな。それだけは何としてもせん。

「はいはー皆んな席に着いて。HRを始めるよ」

む、どうやらタカミチが来たようだ。

近くに雪の魔力も感じられる。

見える・・私にはその場にいるように見えるが。

今頃 雪は緊張でガチガチになつてゐるな。

「突然だけどこの2—Aに転入生がやつてくる事になつた」

『え？ 転入生？』

転入生の単語にクラスがぞわつきだした。
うるさいつるさい。早く雪を出せ。

「その子は今までずっと重い病気にかかつていてね。
ようやく病氣が治つたことでこの2—Aに復学する事になつたんだ。
皆さんも仲良くしてあげるんだよ」

『はーーい！』

仲良ぐだと？

そんな事を言わなくとも雪は誰とでも仲良くなれるさ。
もし雪と仲良くなれない奴は人間じゃない。
いや、私は吸血鬼だし茶々丸はロボットだから…仲良くなれない
奴は…うん、それはきっと壁くらいなものだわ。

「それじゃあ雪くん。入ってきてくれ」

「は、はい」

タカミチの言葉を合図に雪が教室に入ってきた。
ははは、やつぱり緊張していたか。
右手と右足が同時に動いているぞ。

「ワラックスして雪くん。

それじゃあまずは自己紹介からやつてみようか

「は…はい」

タカミチが優しく声をかけるが効果なし。
まるで壊れたブリキのオモチャみたいに、ギギギといった効果音が
聞こえそうな動作で私達に向き直る。
仕方ないな…私が手を貸してやるわ。
私は優しく微笑んで雪に手を振る。

「あ・・・・・・・・・・・・・・(クス

それに気付いた雪も微笑み返す。

これで幾分かマシになつただろう。

どうだタカミチ。お前とは違うのだよ、お前とは。

緊張がほぐれた雪は私たちに自己紹介を

「えっと・・柏木 雪です。ようしくお願ひしましゅ」

して囁んだ・・・。

惜しい・・あと少しだつたのだが惜しかつたな。

恥ずかしさで顔を真っ赤にさせている。

よし、あとで雪を慰めてやる!・・・

『カ・・カワイイ〜〜〜!!』

それにナニかを刺激されたのか、大多数の小娘どもが雪に詰め寄つた。

全く騒がしい・・・

「うわあ、小顔。お人形さんみたいでカワイイ!・!」

「あ、ありがとう・・・」

「真っ白でサラサラな髪の毛だね」

「そ、それは病気の症状らしくて……」

「どに住んでるの？寮？自宅通学？」

「ヒュアちゃんと茶々丸さんと一緒に住んでるの」

「肌も真っ白。それにスベスベー！」

「ひや……あう……く、くすぐったいよお……」

き、貴様ら……雪の柔肌になに軽々しく触れている……
氷像にされたいのか……？

私が抑揚のない魔力が暴風雨のように吹き荒れる。
だが一般人である小娘どもには分かる筈もない。
その代わりに“関係者”的奴等がもの凄く慌てだした。

「つ……さあさあ、質問タイムはもう終わりだ。

皆んなも好い加減 席に着きなさい」

『はーーい』

ふつ、どやら私の魔力に焦つたタカミチがなんとか収めたようだ
な。

今回だけは許してやるわ。

「それじゃあ雪くんはエヴァンジェリンの隣の席でいいかな？」

「はい」

「ほお、雪は私の隣か . . .
そつかそつか、喜ばしいことだ。」

「久し振りだな雪」

「エヴァちゃん . . . うう . . . 血口紹介の時に噛んじやつた . . .
恥ずかしかつたよお . . . 」

「大丈夫だ。雪は上手くやつていたぞ。
そんなに落ち込むことはない」

私は雪を慰めるために頭を撫でる。

ああ . . . なんか随分と久し振りに感じるぞ . . .

「わふ . . . ん~~~~ . . .」

今までの表情から180°。口元と変わって愛らしい笑顔の花を咲かせる。

ふふふははははー・ビうだ小娘どもー

これが私とお前たちを隔てる天と地程の差だ！
羨ましそうに見ていいがいい！！

刹那 side

高畠先生が教室に入ってきた時に転入生の話しが出た。
この一ヶ月間、私達を騒がし続けた例の侵入者だろう。
魔法に疎い私でもアノ異常な魔力量が分かつた。
そして、その異常な魔力がドアの向かう側にいる。

一体どんなヤツなんだ・・・？

話しを聞けば【闇の福音】で有名なエヴァンジエリンさんと一緒に住んでいるという。

そういうえばエヴァンジエリンさんの封印も解けているのだった・・・

もしこの2人が学園に敵対したら私は勝てるか？お嬢様をお守りする事はできるのか？

いや、例えどんなに強大な相手でも私はお嬢様をお守りせねばならぬ使命がある。

その結果・・・自分自身の命を捨てる事になつても・・・

「それじゃあ雪くん。入つてくれ」

高畠先生が入つてくるように促がした。
来たつ！！

一体どんなヤツがやつてくるん

「は・・はい」

入ってきた人物は私の想像を遥かに裏切る容姿だった。
周りを全く警戒しない足運び、一般人となんら変わらない身のこなし、
裏にいる者特有の匂いが全くしない。
言葉で表すなら“一般人”という単語以外に見つからない。

それに、彼女から感じる雰囲気・・・
まるで一切の穢れを知らないよつな・・そう、真っ白な雪を思わせる
ような澄んだ雰囲気だった。
もしやお嬢様以上に清いかもしれない。

そして自己紹介を始めた時に彼女・・柏木 雪さんは歎んでしまった。
恥ずかしさで顔を真っ赤にさせて・・不意にも可愛いと思つてしまつた自分がいる・・

そのあとにクラスの皆さんから質問責めにあつていた。
最後の方に誰かが柏木さんの肌を触つて

「ツツ！？」

突如 教室に暴風雨が生まれた。
暴風雨を生んだ主はすぐに分かった。
この暴風雨を生んだのはエヴァンジエリンさんだ。

抑えようともしない暴力的な魔力が首筋をチリチリと灼き、心臓を鶯掴みにされたみたいだ……

正直 生きた心地がしない……

「つ・・さあさあ、質問タイムはもう終わりだ。

皆さんも好い加減 席に着きなさい」

これに気付いた高畠先生もクラスの皆さんを収める。

それと同時にエヴァンジエリンさんの魔力も鎮まつた……

焦つた・・まさかいいきなり仕掛けてくるのではないかと思った……

そして柏木さんエヴァンジエリンさんの隣の席へと座つた。

2人は少し話しかけていると、エヴァンジエリンさんが柏木さんの頭を撫でだした。

柏木さんは笑顔の花を咲かせて、エヴァンジエリンさんはとても幸せそうな表情をしている。

それは【闇の福音】として恐れられた人とは別人を思わせる程だった。

そして何故か・・それを見て羨ましいと思っている自分がいた……

龍宮 side

このクラスに転入生がやつてきた。

おそらく相手は例の侵入者だろうね。

最初に教室に入った時に闇の福音の封印が解けていたし、いやはや、

メンドくさい事になつたね。

ま、私はお金さえ払つてくれればどちらにでもつくけどね。

そして転入生が入つてきた。

これはこれは・・全くの素人じやないか・・

ただ魔力が異常に多いだけのね。

魔眼で見ても何も　いや、彼女の着けている2つの指輪はなんだ・?

私の魔眼を以つてしても見破れない。

いや、ただの上質な魔法媒体なのは分かるんだが、左手に着けてある紅玉をあしらつた指輪はそんな程度の存在じやない・・

なんというか・・私の本能が叫んでいるんだ。

『アレは私達の頂点が造つたモノだ』とね。

だつたらもう1つの指輪も同じ存在だう。

おそらくだが、かなり強力な認識阻害魔法がかけられているね。

私の魔眼でも見破れない程の。

そして転入生・・柏木 雪は自己紹介をしたんだが噛んでしまつた。何故か慰めてあげたい衝動に駆られる・・
ん?私の魔眼に仔犬の尻尾と耳が見えるぞ・・

これは一体どういう事だ?

そして、クラスの皆んなが雪に詰め寄つた。

だが、最後の方になると雪の真つ白な肌を触りだし

「　　っ！」

いやはや困つたね・・

闇の福音が魔力を開放してきた。

一般の子達は気付かないだろうけど、私達からしたら たまつたもんじやない。

手や足がまるで凍つたみたいな感覚だ . .

「つ・・さあさあ、質問タイムはもう終わりだ。
皆さんも好い加減 席に着きなさい」

高畠先生の言葉に闇の福音の魔力も鎮まる。

ふう・・いきなり魔力を開放されたら私も焦るよ。
一瞬だけど“死”をイメージしてしまった。

これが全盛期の【闇の福音】か . .

よし、学園から討伐の依頼がきたら絶対に断ろう。

そして雪はエヴァンジエリンの隣に座り、お互に仲良く話しあっていた。

それから、さつきまで魔力を開放したとは思えないほどの優しい表情で闇の福音は雪の頭を撫でた。

雪もとても嬉しそうにして闇の福音の手を受け入れる。

それを見て、私の胸はトゲに刺さったみたいにチクチクしてきた . .

授業はマラクスさんのお勉強のお陰で問題なかつた。クラスの皆さんとも楽しくお喋りできた。

楽しかつた・・本当に楽しかつた・・

「雪ちゃん ジャあね~」

「ほな また明日な~雪ちゃん」

そして今は放課後。

私に手を振るのは神楽坂 明日菜ちゃんと近衛 木乃香ちゃん。この2人とはすぐに仲良くなつた。

明日菜ちゃんはマンガと同じでストレート活潑的。すこし羨ましい。木乃香ちゃんはとても優しくて人懐っこい性格だつた。うん、木乃香ちゃんは将来 絶対に良いお嫁さんになる。私が断言する。

「うん、明日菜ちゃんも木乃香ちゃんもまたね~」

私も2人に手を振つて別れた。

“またね”か・・そういえばそんな言葉を言つた事もなかつたんだ、私は・・

「おい、どうしたんだ雪?」

はっ！またネガティブ思考になっちゃってた……
ポジティブ・ポジティブになるんだ私！

「ううん、大丈夫だよエヴァちゃん。

初めての学校で色々と思つた事があつただけ

「初めて……か……

どうだ？初めての学校は？楽しかったか？」

「うんー…ひとつも楽しかったよー！」

私はエヴァちゃんの言葉に正直に答える。
あれが私の願つた学校……

それがこれからも続くと思つと胸が高鳴る。

「そつか、楽しかったか……私も楽しかっただ。

15年間通い続けたこの学校が初めて楽しく感じられた。
雪が一緒にしてくれるだけで楽しく感じられた」

「エヴァちゃん……うん、ありがとう」

私はエヴァちゃんの手を握つた。

エヴァちゃんも私の手を握り返してくれた。

お互いにお互いの手を握りしめて、私たちは家に向かつて歩きだした……

「雪お嬢様。お話しがあります」

学校から帰ってきて、皆さんで晩御飯を食べたあとにマラクスさんが話しきり出した。

「どうしたのマラクスさん？」

「覚えておられますか？」
わたし
私が初めて雪お嬢様にお会いした時の事を
・・・

初めて…確かにマラクスさんは私が学校の授業に着いてこれるよう家庭教師をしてくれてたんだつたけ。

「お」

思い出した。.
サタンおじいちゃんが言つていた。.
マラクスさんは一ヶ月経つと帰るんだつた。.
学校が始まつたつていう事は。.
。

「マラクスさん……もしかして帰つちやうの？」

「はい……そろそろ私は戻らねばなりません……」

そんな……

今まで一緒にいたのに……

帰つちやうなんて……

「帰らないで……マラクスさん……」

気付いたら私は涙を流してマラクスさんに抱きついていた。
マラクスさんはもう私にとつて大事な家族だよ……
いなくなつちゃ寂しいよ……

「申し訳ありません……

こればかりはどうする事もできません……
わたくし

私の身勝手なお願いをどうか……

「ううん……身勝手なのは私だよ……

会つたときからマラクスさんは帰る事が決まつていたんだもん……
でも……私はマラクスさんに帰つてほしくないよ……
マラクスさんは私にとつて大事な家族なんだから……

「家族……ですか……悪魔である私が家族……
わたくし
ふふ、本当に雪お嬢様はお優しい方で御座います。

貴女様にお仕えできて私は大変幸せでした「

そう言ってマラクスさんは優しく私を引き離す。
本当に・・留まるつもりはないんだね・・・

「だからこそ、^{わたくし}私の最初にして最後のお願いです。
どうか、^{わたくし}私を笑顔で見送ってください。
泣いている顔は雪お嬢様に似合いません。
貴女様は笑顔こそ一番素晴らしい。
ですから・・どうか・・・」

笑顔・・・

うん、そう・・だもんね・・・

泣いている顔でマラクスさんを見送る訳にはいかないもんね
・・・

「うん・・分かったよ・・・マラクスさん」

私は涙を拭つて笑顔を向ける。

今までの“ありがとう”を込めて・・・

「感謝いたします・・・」

私の笑顔を見て安心したのか、マラクスさんも笑顔を見せた。

「帰ツチマウノカ マラクス。

残念ダナ。一緒に酒ヲ飲ム奴ガ減ツチマウジャネーカ

「申し訳ありませんチャチャゼロ様。

私もチャチャゼロ様と一緒に酒を飲めて楽しかったです」

「ソツカ・ンジヤア殺シ合イテモスツカ」

「何故その会話に辿り着くのか分かりませんが辞退させていただき
ます」

チャチャゼロちゃんはそんな事を言つてゐるけど、結構寂しがつ
ているのが分かる。

「マラクスさん。これは私が持つてゐる和食のレシピです。
是非持つていって下さい」

「これは...大変ありがとうございます。
では私も。洋食のレシピで御座います。
ようしければお使い下さい」

「あつがとうござります」

茶々丸さんとマラクスさんはお互いにレシピを渡す。

結局2人は最後まで相手の料理に辿り着く事が出来なかつたって言

つていたな . . .

エヴァちゃんは何も言わず、私達に背中を向けている。
だけどエヴァちゃんも寂しがっているのが分かる。

「 . . . 雪お嬢様」

そしてマラクスさんは私に向き直った。

「私は帰つてしまいますが、これで一度と会えないところではありません。

必ず・必ず またお会いしましょう」

「本当 . . . ?

絶対・絶対だよ?」

「はい。誓います」

気が付けばマラクスさんの体は淡く光りだして、存在が希薄になつていた。

もつ・あまり時間は無いんだね . . .

「じゃあね。なんて言わないよ。

また会えるんでしょ?

マラクスさん . . . またね

「ふふ・・はー。またお会いしましょー。雪お嬢様」

そして、一瞬強く光つたと思つたマックスさんはもうこなつた。
本当に・・帰つちゃつたんだね・・・

(あらがとうマックスさん・・そして、またね・・・)

私は心の中でもう一度言つた。

今までの感謝を込めて・・また出会える事を祈つて・・・

今日の夜空はいつも以上に星が輝いていた・・・

転入。そして . . . (後書き)

はい。アンケートの結果は帰るになりました。
ご協力ありがとうございました。

それでもちよくちょくマラクスを出すのでマラクスが好きな人は安心してください。

それと新田先生の名前が分からなかつたので勝手に名前をつけました。

そして龍宮のフラグを建築。刹那のフラグはまだ少し。
雪の耳と尻尾が見えたキャラには漏れなくフラグが立つ事になります。

よしよし、ここから百合のお花畠を創るぞ . . .

もしかしたらまた軽いアンケートを出すかもしけませんが、その時
も「協力お願いします」(^ O ^) -

それでは私は眠いので寝ます。

皆様おやすみなさい . . . ZZZZZZ

お友達に・・なりませんか？（前書き）

更新、遅くなりました・・

オリキヤラが仲間になります。

そしてフラグ少しずつ建築・・

そして大事なことを忘れていました・・・

第一話の主人公説明に、雪の使う魔法を加筆しました。

本当は出てきた時に加筆するつもりだったんですが・・・

気が向いたら見てみてください。

新しい魔法が増え次第、隨時 加筆していきます。

お友達に・なりませんか？

雪 side

「おはよひ雪ひちゃん」

「みんな　おはよひー」

2—Aに転入してから一週間。

今では殆んどの人達と仲良くなりました。
ネギ先生を好きになる のどかちゃん。

そして、のどかちゃんの友達の夕映ちゃんとバル（やつ呼んでと言
われました）。

それに、まきちゃんや、委員長」と あやかさん。
本当に沢山のお友達ができました！

「ふう・・朝から元気な奴らだな・・・

隣を歩いているエヴァちゃんが呆れた声を出す。

学校が始まつて一週間が経つたけど、エヴァちゃんはまだ一回もサ
ボつていない。

それを見て、高畠先生がスゴく驚いていた。
エヴァちゃんは、やれば出来るんだから！

「あ、雪ちゃんやー。おはよひー」

「おはよー。木乃香ちゃん」

すると、ほんわかした笑顔の木乃香ちゃんが手を振つて じつにやつてきた。

あれ? 今日は1人なんだ?

「木乃香ちゃん。明日菜ちゃんはどうしたの?」

「明日菜は新聞配達があつたから少し遅れてくるんよ。ウチは待つって言つたんやけど、明日菜が先に行つていひつて

そつか . . そつういえは明日菜ちゃんは新聞配達のアルバイトをして
いたんだよね . .
立派だなあ . . 明日菜ちゃん . .

「大変だけどスゴイね。明日菜ちゃんは」

「雪ちゃんやつてエライやんか。
病氣で今まで学校に行けなかつたんやろ?
それでも皆んなに着いてこいつと、勉強を頑張つてるやん。
ほら、良いこ良いこ」

「えへへ . . ありがと 木乃香ちゃん . .」

木乃香ちゃんは私の頭をポンポンと撫でてくれた。

「…んにゅ…やつぱり誰かに頭を撫でられるのは気持ちいい…」

「おい、近衛 木乃香。

少し雪に近すぎるんじゃないかな？」

突然、エヴァちゃんが、目尻を少し上げて私たちを見る。
私と木乃香ちゃんは、そこまで近くないよ？

「『』めんなあエヴァちゃん。

雪ちゃんが可愛えかつたから つい独り占めしてもうた。
堪忍なあ？」

「ひ、独り占めなど…べ、別に私はそんなんじや

「それやつたら もう少し『』しても んえよね？」

「ぐつ…お前は…つ」

木乃香ちゃんの言葉を聞いて、エヴァちゃんは悔しそうに、それでいて少し恥ずかしそうな表情をした。

そして木乃香ちゃんは、勝った表情をエヴァちゃんに向けていた。
2人とも、どしたのかな？

「雪ちゃんは ほんと撫で心地がええなあ」

髪の毛サラサラやし、
ポカポカしどる。

ナニナニ

「わふつ・んへへ、気持ちいい・・・」

えへへ・・そう言つてもらえると嬉しいな。
あ、もうちょっと上の方を撫でて。

「う、うーー！私も雪の頭を撫でるやー。」

エヴァちゃんが焦った表情をしながら、両手を上に上げてピアノ演奏とジャンプする。

ふふ、まるで子供みたい。

卷之二

身長の関係もあって、私は少し屈んでエヴァちゃんに頭を向ける。その間も、木乃香ちゃんは優しく頭を撫でてくれた。

「うむ……（なでなで」

エヴァちゃんは、とても満足した表情をして、私の髪を梳かすようにして撫でる。

木乃香ちゃんのナースナースも気持ちいいけど、ヒガアちゃんのナースナ
スも気持ちいい……

「ヒガアちゃんも撫でるの上手やな～
雪ちゃん、とっても嬉しそうやん」

「当然だ。

私と雪は一緒に暮らしているのだからな。
毎日毎日 雪の頭を撫でてごらんが

「毎日か～、羨ましいな～」

「ふふふ、そだらう羨ましいだろ。
私と雪はそれだけの仲なのだ。
お前達では辿り着けんよ」

「あはは～。面白いこと言こよるね～。
でも、そんな油断しとると足元掬われるえ？」

・・あれ・・・?

一瞬だけど2人から火花が散つていたような
気のせいだよね？

「ふつふつふつふつふつふ・・・・・・・・

「あはははははは・・・・・・・・

2人とも仲良く笑っているから、どうやら私の勘違いだつたみたい。

でも なんだろ ．

2人とも目が笑っていないような気が ．

(． ． ． ． ． ん?)

いま誰かの視線を感じたような ．

後ろを振り返つてみたけど、誰もいなかつた。

今日はなんか勘違いが多い日だな ．

エヴァ side

アノ睨み合いから数分。

木乃香はクラスの皆さんに呼ばれて、渋々といった様子で私達から別れた。

おそらくだが、木乃香も見えているのだろう。
雪のアレが ．

大耳・尻尾

まさか、こうも早くにライバルが現れるとは ．

これも雪の人徳の為せる技か ．

喜ばしい反面、些かよろしくないな ．

俯瞰的に見ても、木乃香は良い人間の部類に入る。皆んなとも仲良く接し、物事もよく捉えている。

話しを聞けば、料理も上手いらしゃいじゃないか。
それに、雪も木乃香の事を気に入っている。

1人目にしては随分と強敵じゃないか……
先の舌戦も、危うく掬われる所だつた……
したたか・・かつ、攻め時は一気に飛び込んでくる。
侮れん相手だな。近衛 木乃香。

「……だが・・・そう簡単にいかんぞ……?」

私の絶対なるアドバンテージ。それは、私と雪が一緒に住んでいる
という事だ。

これで私は他の奴等より一歩、三歩抜きん出でている。
それを安々と越える事などできんや。

フツハツハツハツハ!

私の勝利は必然!勝ち戦ほどつまらんものはないな!
天と海底に等しき差。それがどこまで縮まるか見るとしよつ。
せめて山頂くらいまでは縮めてくれよ?
でないと私がつまらん。

茶々丸 side

どうも皆さん。雪さんをこよなく愛している茶々丸です。

『え？ いたの？』 ですかって？
勿論いましたよ。最初っから。

木乃香さんとマスターが雪さんの頭を撫でて、火花を散らしている所も見てました。

『一言も発していないじゃん』とか、『全然気付かなかつた』とか言う人はキレイです。

マスターは、既に木乃香さんに勝利していると思つていますが、雪さんと一緒に住んでいるのは、なにもマスター一人だけではありますせん。

そして、勝利するのもマスターではありません。
私が最高に美味しい所を持つていきますから。

『卑怯だ』ですか？

愛に正道も邪道もありません。

そんなこと言う人は大キレイです。

そんな人には、先ほど頭を撫でられていた雪さんの映像や、私が毎朝録画している雪さんの寝顔を見せてあげません。

さて、それではそろそろ話しを進めましょう。

授業風景や学校生活は特筆する事もなく平和平凡。

今は授業も終わって放課後です。

「ふんふふ～ん ねえ茶々丸さん。

あの子たち、今日もいるかな？」

軽快な鼻歌と一緒にステップを踏み、両手に持つたビニール袋をガ

サガサと揺りしながら、雪わんはウキウキとした表情をしながら振り向く。

ああ・・とても愛らしいです・・・

「ええ、今日もいますよ」

その笑みを見て、私も微笑み返す。

“あの子たち”というのは、仔猫たちの事です。

以前 散策していた時に、仔猫たちが集まっている場所を見つけまして、エサをあげたところ、懐かれてしまいました。
最初は私一人だったんですけど、雪さんも「一緒に緒するようになり、以来こうして2人でエサをあげに来ているのです。

ちなみにマスターは、「ガラじやない」と言つて既に帰宅しています。

この時間は私と雪さんが2人きりになれる唯一の時間です。
雪さんと2人きり・・ああ、なんと甘美な響きでしょ・・・
鼻から愛が・・・

「あ、着いたよ茶々丸さん」

いけません。少し物思いに耽つていたようです。

私たちは人通りの少ない広場に出ました。

最初はシーンと静まり返っていましたが、少し待つていると・・・

「――ヤア」

一匹の仔猫が現れました。

仔猫は、私たちが来たのだと気付くと、安心して近付いてきます。それに続いて、他の仔猫たちも集まつてきました。

「あはは、今日も McConnell ね。
よしよし、良い子～」

「こやむ・・」

雪さんは近くにいた仔猫の喉を撫でました。

仔猫は気持ち良さそうにして、雪さんの手を受け入れる。すると、他の仔猫たちも撫でてアピールをしながら雪さんに寄り寄せました。

雪さん、大人氣です。やはり雪さんの人徳は種を超えるみたいです。これは一種の才能ではないでしょうか？

「 McConnell 落ち着いて。くすぐつたいよ～」

あとで McConnell 撫でてあげるから、まずはご飯を食べよっ。」

『――ヤア――』

雪さんは、殺到する仔猫たちを落ち着かせて、工サを食べるよつて

促す。

仔猫たちも分かつたらじぐ、素直に鳴いて雪さんの言葉にしてたがう。
そして取り出す本日のHサ。

セール中で大特価だった、銀のスプーンです。

「よし、皆んなたくさん食べてね？」

持ってきたお皿に移し終わると、仔猫たちは一斉にHサを食べ始める。

すると、小鳥たちも集まつてきました。

ここには仔猫以外にも、仔犬や小鳥たちもくるので、常にHサは持つているので大丈夫です。

「皆んな美味しいかニヤ？」

はうっ！…

雪さん…語尾に『ニヤ』を付けるなんて反則です…
いくら語尾に『ニヤ』を付けても、皆んなは分かるはずありません。
ですが一応 録画を…
あとで無限リピートをかけて、家でゆつくつと楽しむとしましょう…
ふふふ…想像しただけで鼻血が…

「二二や二」

「ハーメー！」

「ハーメーさん」

「ハーメー..」

「ガウツー..」

どうやら通じたのか、それとも反応しただけなのか、仔猫たちは頷いて・・・つて、ガウツー..

「ゆ、雪さん！それ狼です！」

何故か仔猫たちに混ざりて狼が混ざっていました。

最初は犬かと思ったのですが、私の量子パソコンピューターだ即座に狼と答えを導き出す。

しかも微量ですが魔力もあります。

私も流石に焦ります。もし雪さんに危害が及べば・・・つ！

「狼？へえ～狼なんだ？」

普通の犬より大きいなあ、とは思っていたけど、スゴイね？

「ガフツー..（バクバク」

雪さんは、なんとも場違いな発言をしつつ、狼の頭や喉を撫でる。

狼も気持ち良さそうにして鳴きながら、ペティグリィ ヤムをバクバクと食べる。

・・・狼が犬用のエサを食べていいいのでしょうか？
やはり同じイヌ科だから大丈夫なのでしょうか？

あまりに常識はずれな反応をする雪さんに、私はただ啞然とするしかありませんでした・・・

s i d e o u t

狼が現れた小さな騒動から十数分。

茶々丸はクラスメイトの葉加瀬に呼ばれて渋々と場を後にした。
仔猫たちも帰ってしまい、残つたのは、雪と狼だけになつた。

「えへへ～。もふもふだあ～」

「ガウガウ」

雪は狼に抱きつくような形で顔をうづめる。

どうやら狼の体毛は もふもふしているひじく、雪はお気に召した
ようだ。

狼の方も気持ち良さそうに鳴いてくる。

「やういえばキミは狼なんだよね？
どうしてこんな所にいるの？」

もしかして一人……じゃなかつた。1匹?」

「ガウ(＼＼＼＼＼)

「どうやら狼は雪の言葉が完全に分かつてゐるらしい、＼＼＼＼と頷く。

茶々丸が魔力を観測していたので、やはり普通の狼ではないらしい。
「そつか……でもそれだと危ないよね。
狼がこんな所にいるなんて、他の人達が大騒ぎしちゃうもん。
うーん……そうだ! 良かつたらウチに来る?
エヴァちゃんや皆んな次第だけど、私がなんとかしてあげる!」

「ガウガウ!」

どうやら雪はこの狼を飼つつもりのようだ。
確かにエヴァ達を説得できれば、飼うこともできるだらう。
狼は大きい体でジャンプしながら喜んでいる。

そういうえば読者の皆んなには説明していなかつたが、この狼の大きさは、ラブラドールよりも一回り大きいサイズだ。
そして毛色は雪と同じ純白。
うん、やはりデカイ……

「やうだと決まれば名前を決めなくちゃいけないよね。
いつまでもキミじゃ変だし、今の内に決めておこう。

なにがいいのかな……うへん……

もつ既に雪の中では飼いしーとが決まってこるらしー。
額に指をあてて、名前を懸命に考える。
しばらく考えていると、名前が決まったみたいだ。
この狼の名前は……

「 ポチ！」

……ぢりやーり雪のネーミングセンスは壊滅的のよひだ……
ものすいじに自信満々な表情で、ものすいじベタな名前を叫ぶ。

「ガウガウ！－（ブルブル

流石にその名前は嫌だつたらしく、激しく首を振る狼。
よほど嫌だったのか、若干 涙目である。

「もしかてダメだった?
それじゃあ別の名前を考えないと……
うへんと

ジャリ

あのネーミングセンスで、一体どんな名前が飛び出してくるのか非常に怖いところだが。

突如砂利を踏む音が聞こえた。

当然、ここは公共の場所なので普通に人も来る。だが、現れた人物は“普通”的の人ではなかつた。

「あ、あなたは・・・」

雪とは真逆の黒い髪。

それをサイドテールにして、大和撫子が似合つような容姿。中に入っているのは竹刀だろうか・・・長い竹刀袋を肩にかけるその人は・・・

「こうして話すのは初めてですね。

私の名前は桜咲 刹那です」

雪のクラスメイト。

出席番号16番、桜咲 刹那だった。

「こうして2人で話すのを待っていました。

いつもはエヴァンジエリンさんや絡繆さんが一緒にいましたからね」

「え？それって一体・・・」

雪は事態に着いていけず、首をキヨトンとして傾ける。
この会話から察するに、どうやら雪が朝に感じた視線は刹那のもの
だつたらしい。

「実は貴女に一、二質問したい事があるんです。
エヴァンジエリンさん達がいない今しか聞けません。
悪いですが、少々お付き合い願いますか？」

「べ、別に大丈夫です。」

刹那の言葉にすんなりと頷く雪。
だが刹那の出す雰囲気が原因なのか、敬語になってしまった。

「ありがとうございます。それと、話す時は普通に話してください
ね。」

まず最初に一つ目。柏木さん、貴女は魔法の存在を存知ですね？」

「え？ それって……」

刹那の言葉に雪は驚いた。

普通だつたら一笑に付すような質問だが、雪が嘘をつけるはずもな
く、肯定と受け取れるよつた反応をした。

「私も魔法の関係者と言つことですよ。
次の質問です。貴女は約一ヶ月程前に、この麻帆良学園にやつてきましたね？」

「う、うん。そうだよ」

刹那は補足もそこそこに、すぐさま次の質問に移る。
雪は刹那が魔法関係者だと知つて少し驚いたが、刹那の質問に答える。

「そうですか・・・それでは最後の質問です」

今までの雰囲気から一変。

刹那は目つきを険しくして雪を見据える。

彼女がここまでするのには訳があった。

彼女には守りたい人がいた。

自分を友達だと言つてくれた大事な大事な人。

その人が、学園を騒がした侵入者と仲良くしている。

侵入者・・・つまり雪は、悪い人間ではないと分かっているのだが、
彼女は直に聞きたかったのだ。

雪の目的を・・・

「貴女はなにが目的で学園に」

だが、それを遮る者がいた……

「ガルルルルル　・・・ツ！」

刹那の険しい雰囲気を感じ取つたのか、刹那と雪の間に、白い牙を剥き出しにして狼が割つて入る。

「貴様ツ
・・化生の類か！？」

刹那も狼から感じる力を感じ取り、すぐさま臨戦態勢に移つて刀を抜く。

「ふ、2人とも落ち着いて！」
ケンカはダメだよ！」

2人の険悪な雰囲気が漂うなか、雪は必死に2人を止めようとする。だが……

「グルルルルルル・・・ツ！」

• • • • • • • • • •

両者はお互に止める素振りを全くみせない。
寧ろ険悪な雰囲気は増すばかり。

まさにこの場は一触即発の空氣だった。

「ぐすん・・・2人ともお・・・ひつく・・・
ケンカは・・・ぐすつ・・・ダメだよお・・・」

争い事をなにより嫌う雪は、一向に止めようとしない2人を見て、ついに泣き出しちゃった。

その時。鬼が現れた

「……………」
「……………」

自動車もかくやとこう猛スピードでH'ヴァンジH'ロンが爆走してき
た。
そのまま雪の田の前で、『キキイイイイー』と急ブレーキをかけて

「雪い！大丈夫か！？おお・・なんといふことだ
私が來たからもう大丈夫だぞ！」

「ぐすん・・え?あちやああん・・」

ヒウアはすぐさま雪の頭を胸に寄せて抱きしめる。一体どうして雪が泣いていることに気付いたのか感るべし『雪』〇→Eぱうあ～である。・・・

「誰かにイジメられたのか？」
「一体だれが」

刹那の存在に気付いたのか、まるで首がねじ切れるような勢いで、『グリュン！』とオカシナ効果音を出して刹那を睨みつける。

「れぬかへつらひたかたやかために……」

「ひつ」

「お前だな
お前だろ お前なんだろ
お前しかいない
お前に決
まっている
よし殺す！！」

反論を全く許さない怒涛の問い合わせで、見事ワンブレスで言い切った。

全力で開放された魔力に刹那も怯えきついている。

「ふふふふふ…大丈夫だ、痛くしない。
少しヒヤッとするだけで、すぐに終わる。
せめてもの慈悲だ。辞世の句くらいは選ばせてやろう。
よし、それじゃあお別れだ」

どうやら辞世の句を選ばせるつもりはないようだ…
エヴァは静かに魔法の詠唱を始めた。

クイ

その途中、エヴァの服の袖を引っ張る者がいた。
まあ誰だか既に分かっているのだが…

「けんか…ダメ…」

片手でエヴァの袖を引っ張り、片手で田を『グシグシ』といすりながら、雪はエヴァを止める。

「ゆ、雪…だがな…」

「けんか……ダメ……！」

「ぐつ……！」

雪の涙田にエヴァは止まるしかなかつた。
顔を赤面して、鼻を摘まみ、エヴァは詠唱を止める。
雪を泣かす選択肢など、エヴァの中にはミクロン単位もありはしないのだ。

「……分かつた、取りあえず皆んな家に来い。

話しあそこで聞いてやる。

そこに隠れている狼もだ。いいな」

「グル……」

エヴァは広場の影に隠れている狼も呼ぶ。

実はエヴァが現れた瞬間、狼はエヴァの力を見抜いて即座に隠れたのだ。

だが逃げた訳ではなく、隙を見つけて喉仏を噛み千切ろうと虎視眈々と潜んでいたのだ。

やはり普通の狼ではないらしい。

「フン、私の喉元を狙っているのか。
雪がいる手前、その無礼は許してやる。
早くお前も來い。でないと置いていくぞ」

エヴァは狼を一瞥すると、すぐ足跡を返して歩き出す。狼もこれ以上は無駄だと悟ると、エヴァ達に着いて行った。

~~~~~

エヴァの乱入から少し落ち着き、今はエヴァの家で一同が会していた。

「あと、まずは最初に桜咲 刹那。

お前から説明しろ」

エヴァはイスに座つて頬杖を付きながら刹那に説明を要求する。その姿は『ふてぶてしい』の一言に似せる。

「わ、私はその…柏木さんの目的を

「違う。そんな事ではない

「え？」

だが刹那の答えはエヴァの望む答えではなかつたらしく。  
途中で刹那の言葉は遮られた。

「お前の事など興味ないし、知りたくもない。  
私が知りたいのは、お前が雪を泣かせたのかどうかだ。  
他の事など細事に過ぎんわ」

「…どうやらエヴァは雪を溺愛しているようだ。

本当にどうでもいいような表情をする。

「で、どうなのだ？お前が雪を泣かせたのか？」

「わ、私は…」

エヴァの言葉に刹那は言い淀んだ。

泣かしたと言えば泣かしたし、泣かしてないと言えば泣かしていない。

否定できないのは刹那の生真面目さ故だ。

「桜咲さんは悪くないよ

とセリに、雪が手を差し伸べた。

「桜咲さんは悪くないよ

「…うむ…・雪がそう言つのなら許してやる」  
「だから桜咲さんを責めないで…ね？」

「…うむ…・・雪がそう言つのなら許してやる」  
「あ、ありがとうございます」

エヴァは渋々といった様子だが、刹那を許した。  
刹那は安堵の表情を浮かべて力を抜く。  
全盛期のエヴァと戦つても、万が一にも勝ち目はない。  
今ここで倒れる訳にはいかないのだ。

「よし、それじゃあ次だ。その狼は一体なんだ?  
微量だが魔力が感じられる。  
それにさつきの身のこなし、私達の言語を理解するその賢さ。  
明らかに普通の狼ではないな」

「あ、この子は広場で出会ったの」

エヴァは次に狼の事を聞くが、それには雪が答える。

「広場？・・・ああ、雪と茶々丸がエサをあげている場所か」

「そう。えっとね、それでね。  
この子をウチで飼えないかなあ～って」

「なに？ 飼うだと？」

雪の提案にエヴァは眉を寄せた。  
確かに飼うのは無理ではないが、些か得体が知れない。

「うん。こんな所にいたら他の人達が大騒ぎしちゃうし、なにより  
この子は家族がないの。  
お願い！なんとか飼えない？」

「だがな……こいつの素性が……」

「ダメなの……？」（うる

エヴァが渋った瞬間に出了した、伝家の宝刀  
エヴァの心にテラ級のダイレクトダメージ。  
涙目。

「グハッ……！  
い、いいだろ？ ……

ちゃんと世話をするのだぞ？」

「ほんと…？」

「わあーい！良かつたね…！」

「ガウガウ！」

雪と狼は両手を握りながらジャンプして大喜びした。

エヴァもその光景を見て、「やれやれ」と言いながら微笑む。

「あの・・・エヴァンジエリンさん」

すると、突然、刹那がエヴァに語りかけた。

「ん？ なんだ？」

「その、柏木さんは何者なのですか？」

やはりこれだけは誰かに聞かなければ気が済まないのだろう。  
刹那はエヴァに雪の事を聞いてみた。

「何者・・・か・・・

雪はただの普通の女の子だよ。

超が付くほどのお人好しで、誰にでも優しい・・・な。

吸血鬼である私を受け入れてくれた、大切な家族だ」

その顔は、【闇の福音】と怖れられた者とは別人だと思つほどの明るい笑みだった。

それはさながら、新芽が芽吹くような春を思わせるようだ。

「もしかして話されたのですか？」自分の正体を？」

「ああ、話したぞ。

それでも雪は私を受け入れてくれた。

お前の体に眠る『禁忌』も受け入れてくれるかもしけんぞ？」

「つ・・・！」

刹那はその単語を聞いて、体を強張らせた。

彼女の体には、ある禁忌が眠っている。

そのせいで彼女は幼少期から酷い扱いを受けた。

彼女が守りたいと思つてゐる人と一緒にいられないのも、この禁忌による所が強い。

「ま、そんな早くに決断できんさ。

精々 悩んでおけ小娘。

人は悩みを乗り越えた時にこそ強くなる」

エヴァは刹那に先輩として少しアドバイスをする。

同じ悩みを持つていた人として、共感した部分があつたのだろう。

「 ねえねえ2人とも！

この子の名前を決めようよ！」

とそこへ、狼とじやれあつてゐた雪が戻ってきた。

わざと決め損ねた名前を付けたいらしい。

「最初はオーソドックスにポチつて名前だつたんだけど、この子が  
気に入らなかつたみたいで。

次にガウ君つて名前を付けんだけど、それも氣に入らなかつたらし  
くて‥」

（（こや、流石にその名前はない））

2人の心が重なつた瞬間であつた。

やはり雪のネーミングセンスは少し問題があるらしい。

「名前か‥よし、刹那、お前が決めてやれ

「わ、私ですか！？」

エヴァは、刹那が仲良くなるチャンスだと思つて話しが振つた。  
加えて言えば、変な名前を言えばからかつてやるつもりで‥

「わづですね‥・体毛が白いですし、安直ですが、白菊しらぎくと書いつの  
せどりでしょ！」

“どうやら ひやんとした名前だったようだ。

ヒヴァは心中で小切く叩打ちした。

「白菊か . . .  
キミはそれでいい？」

「ガウ！ガウガウ！」

どうやら狼の方も氣に入ったようだ。  
嬉しそうに吠える。

「よし、それじゃあキミの名前は白菊で決定！  
ありがとうー桜咲さん！」

「い、いえ、私は . . .」

雪は大喜びして刹那の手を握る。

だが刹那の方は少し戸惑っていた。

どうやらこう言つのはあまり慣れていないみたいだ。

「そうだ、桜咲さん . . . ちょっとお願ひがあるんだけど . . . いい？」

「お願ひ . . . ですか？  
どんな事でしょう？」

何かを思いついたのか、雪は刹那にお願いをした。  
刹那も、間接的にだが雪を泣かせた責任もあるので、話しを聞いてみる。

「その . . . ね。

お友達に . . . なりませんか？」

「その . . . ね。

雪は改めて刹那の前に手を出した。

刹那は言葉の意味が理解できず、説明を求めるよつて雪を見た。

「桜咲さんと じつして仲良くなっているし、白菊の名前まで決めてくれたんだもん。

できれば名前で呼び合いたいな。

だから、お友達になりませんか？」

雪は再度、刹那の前に手を出す。

刹那も雪の言葉を理解したらしく、微笑んで . . .

「ええ、よひじへむ願いします。雪さん」

静かに、そして強く、雪の手を握った。

「うん、よひじくね！刹那さん！」

雪も嬉しそうにして刹那の手を握り返す。

「ふふふ・・やはり雪の人徳は素晴らしいな。  
見ていくにつづちも心が安らぐ・・・」

エヴァはそれを見て小さく微笑む。

その声は誰にも聞こえることはなかつた。

柏木 雪。刹那と友達になり、白菊を飼う。

お友達に・・なりませんか？（後書き）

白菊が雪達の新しい家族になりました。

ちなみに白菊の元の名前は「白妙菊」

花言葉は「あなたを支える」だそうです。

雪の従者にはピッタリな花言葉ですね。

最初はオーディーン繋がりでフヨンリルにしょいかと思つたんです  
が、それだとパワー・バランスが崩壊してしまつて・・・  
取りあえずは神格のある狼です。

そして、本編では刹那の出席番号は15番なんですが、雪がいるので一つ繰り上がります。

そしてここにきて重大な問題が浮上・・・

雪のアーティファクトが思いつきません・・・

パクティオーしたいよ～！キスさせたいよ～！

でもアーティファクトが浮かばない！！

一体どうすれば・・・

読者の皆様にアンケートでもとつてみますかね？

きっと皆様は素晴らしいアーティファクトを導いてくれるはず・・・

もし浮かばなかつたら本氣でアンケートします。

素晴らしいアーティファクトを考えているのなら、今でもいいです  
けどね～（ ）

それでは皆様、またお会いしましょう（ ^――^ ）～

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5576w/>

---

魔法先生ネギま! ~白雪の軌跡~

2011年11月20日03時30分発行